

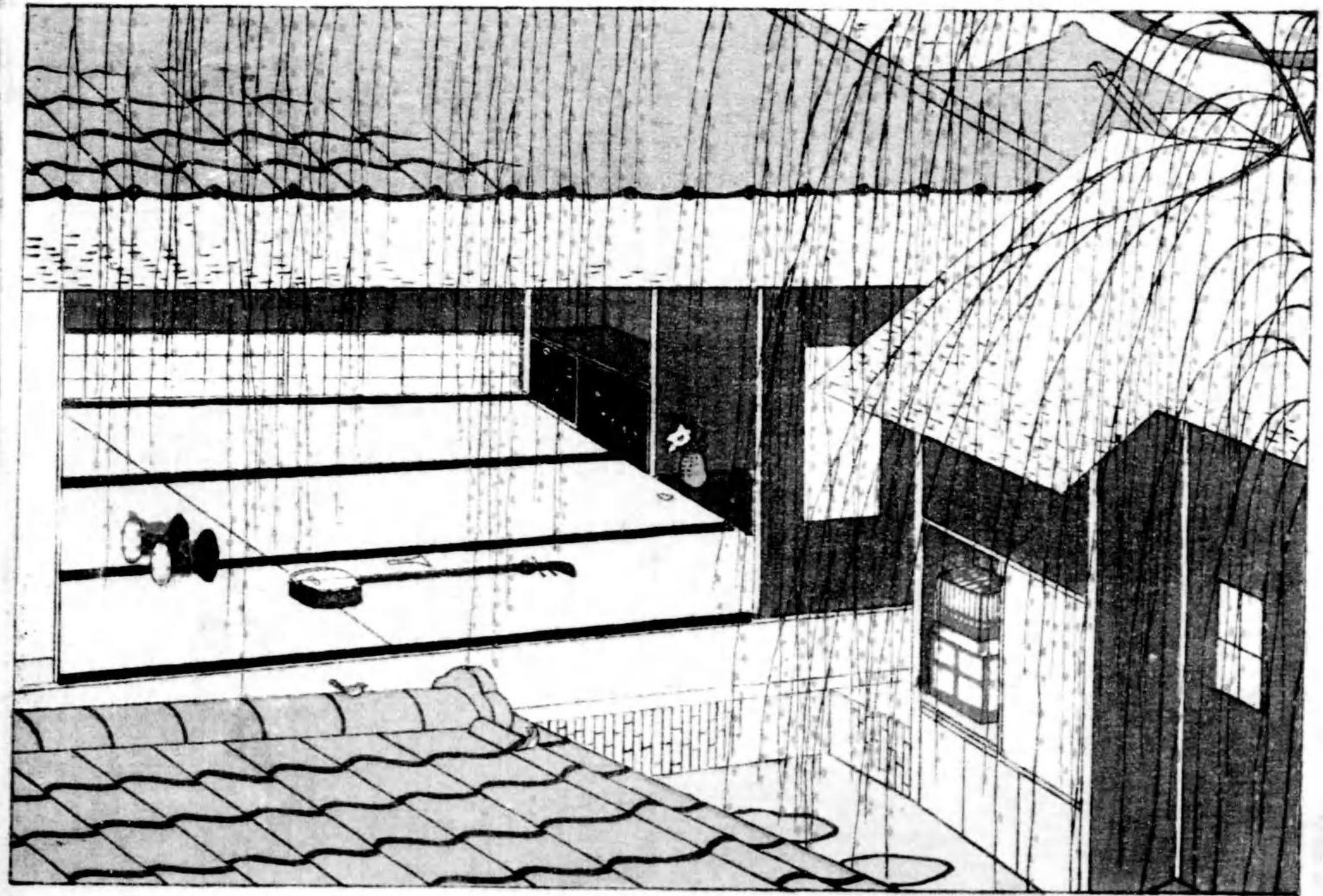
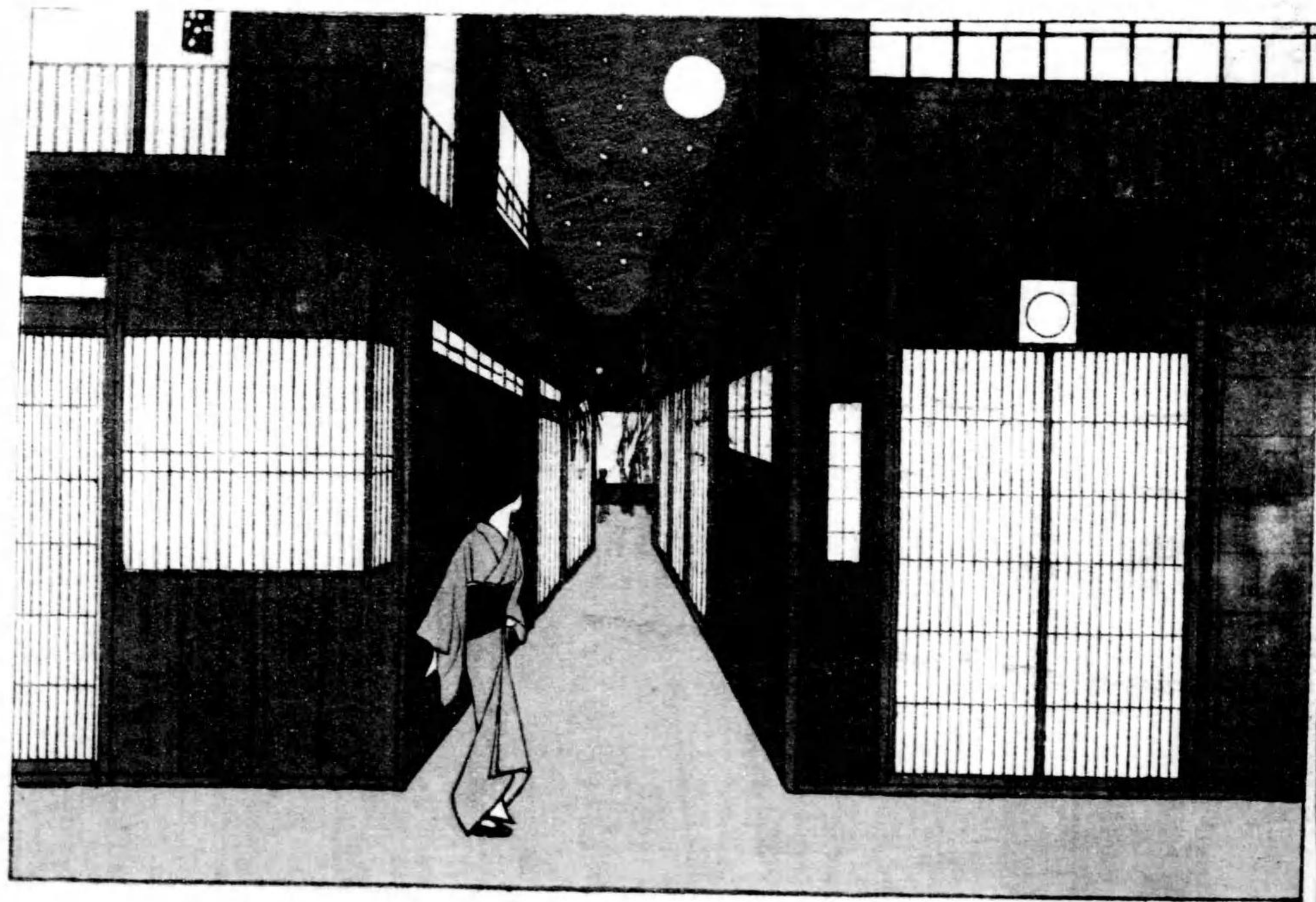
特104

562

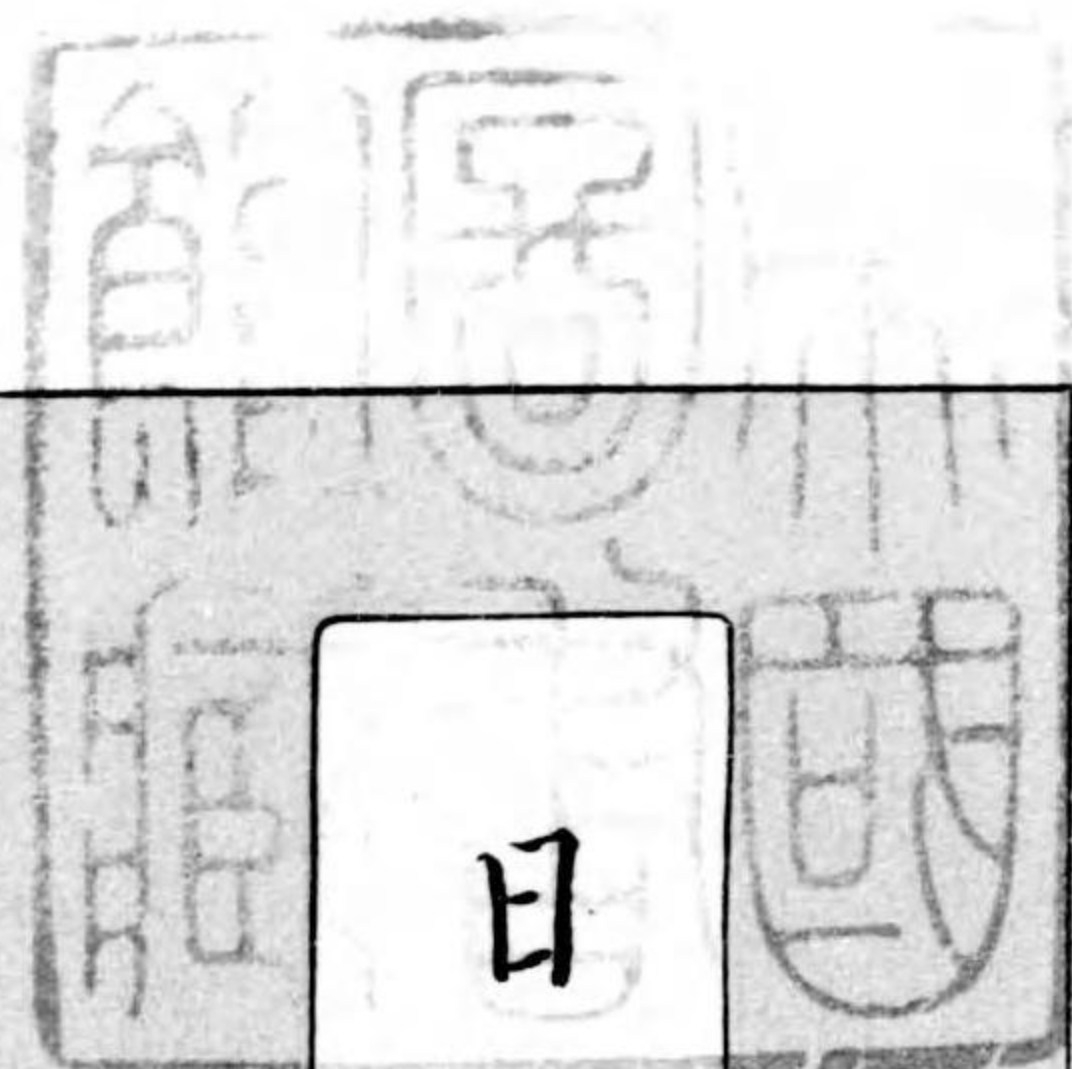


始

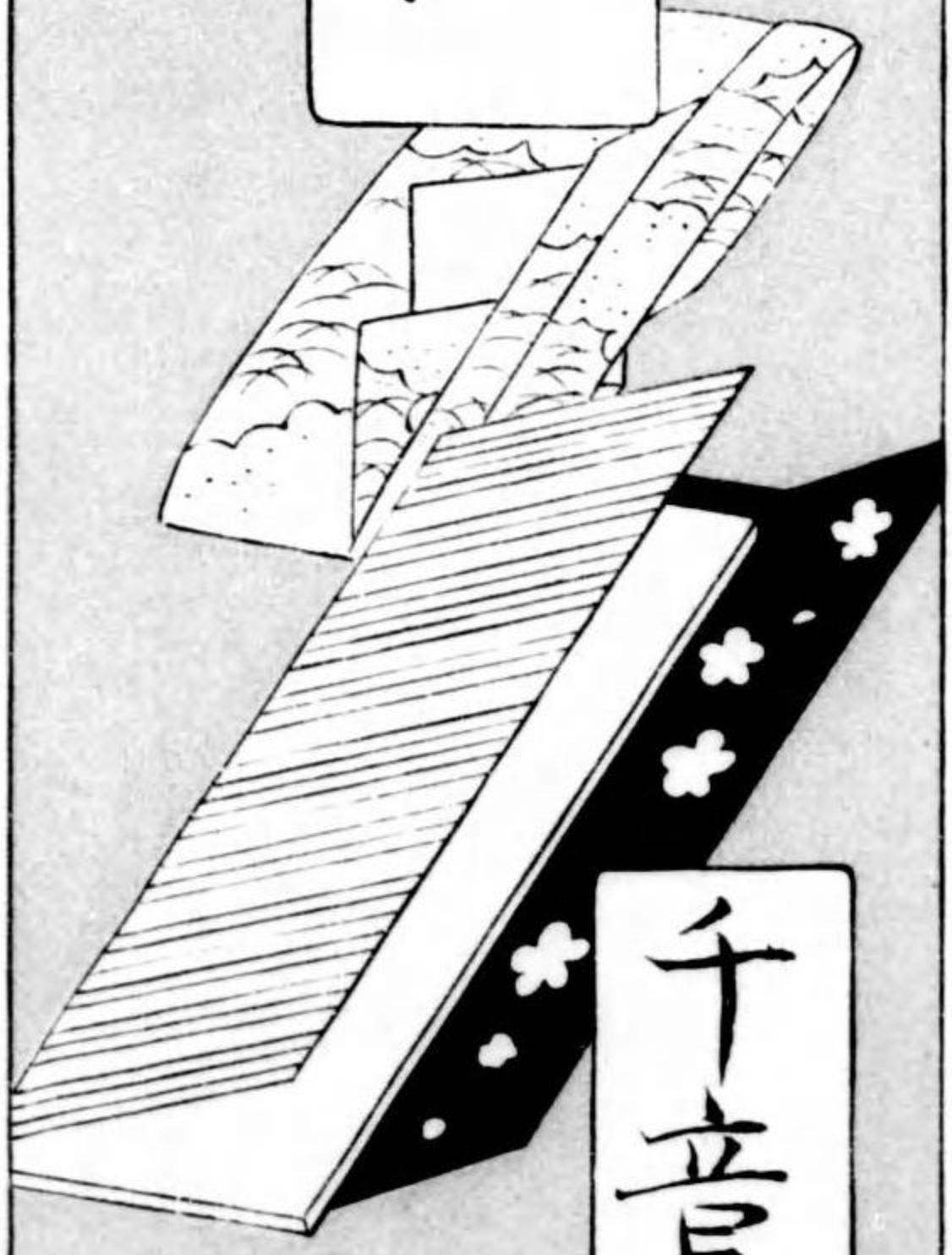




持104
562



日本橋



千章館

大正
3. 9. 25
内交

編 中 目 次

篠	蟹	一
檜	木	九
銀	貨	一七
手	入	二九
露	地	四二
柳	に	五〇
河	童	六九
榮	螺	八三
お	な	九二
横	槩	一〇九
熊	の	一七
縁	日	一三〇
サ	の	一三四
梅	々	一四一
口	紅	一四九

一重	櫻	一五七
伐木	丁々	一六五
彩	ある雲	一八五
鴛鴦	一九一
生理學	教室	二〇〇
美	舉	二一六
怨靈	比羅	二二三
一口	か一挺か	二二三
艸	冠	二四〇
川岸	の浦島	二四八
頭	を釘	二五三
露	霜	二六一
彗	星	二六六
綺麗	な花	二七〇
振向	く處を	二七五
あは	せかみ	二七九
振	袖	二八三

日本橋

鏡花小史

篠蟹

第一

「お客に舐めさせるんだとよ。」
 「何を。」
 「其の飴をよ。」
 腕白もの、十ウ九ツ、十一二なのを頭に七八人。春の日永に生欠伸で鼻の下を伸ばして居る、四辻の飴屋の前に、押競饅頭で集つた。手に手に紅

だの、萌黄だの、紫だの、彩つた蝶貝の獨樂。日本橋に手の届く、通一つの裏町ながら、撒水の跡も夢のやうに白く乾いて、薄い陽炎の立つ長閑さに、彩色した貝は一枚一枚、甘い蜂、香しき蝶に成つて舞ひさうなのに、ブン／＼と唸るは虻よ、口々に喧しい。

此の聲に、清らかな耳元、果敢なげな胸のあたりを飛廻られて、日南に惱む花がある。

盛の牡丹の妙齡ながら、島田鬚の纏れに影が映す……肩揚を除つたばかりらしい。姿も大柄に見えるほど、荒い耕の、聊か身幅も廣いのに、黒縹子の襟の掛つた縞御召の一枚着。友染の前垂、同一で青い帯。緋鹿子の背負上した、それしやと見えるが仇氣ない娘風俗。つひ近所か日傘も翳さず、可愛い素足に臺所ばきを引掛けたのが、紅と浅黄で羽を彩る飴の鳥と、打切飴の紙袋を兩の手に、お馴染の親仁の店。有りはしないが暖簾を潜りさうにして出た處を、捌いた襦も淀むまで、むら／＼と其の腕白等に寄つ

て集かられたものである。

「養てかい、焼いてかい。」

「何、口からよ。」

と、老成た事を云つて、中でも矮少が鼻まで届きさうな舌を上舐にべろんと行る、此奴が一藝。

「まあ、可笑しい。」

若い妓は、優しく伏目に莞爾して、

「お客様が飴なんか。大概御酒をあがるんですもの。で、一寸紙袋を袖で抱く。」

「其だつてよ、其でもよ、髯へ押着けやがるぢやねえか。」

「不見手様。」と又矮少が、舌をべろんと舐す。

若い妓は柔しかつた。むつともしさうな頬は尙ほ細つて見えて、

「だつて、看板に掛けてやがつて。」と一人が前を遮るやうに、獨樂の手練をづるりと伸す。

「違つたか。雪や氷、冷い氷よ。そら水の上に、なんだ。」

「不見手様。」と矮少が願でしやくる。

「矮小やい、舌を出せ。」

「出せよ、畜生。」

「うゝむ、うゝむ、然う號令を掛けちや出せやしませんさ。」

と焦つて頭突きに首を振る。

「馬鹿、咽喉ぼとけを掴んで居やがる。」

「ほゝゝ。」と罪の無い皓齒の答。

「畜生、笑つたな、不見手。」

と矮小は、ぐいと腕を捲つた。

「可厭、又…大な聲をして。」

四

「大な聲が何うしたんでえ。」
と、一人の兄哥さん、六代目の假色さ。

第二

其の若い妓は、可愛い人形を抱くやうに、胸へ折つた片袖で、面を蔽ふ姿して、

「堪忍して下さいな。」

と遺瀨なさゝうに悄れて云ふ。

「やあ、謝罪るせ、ぐうたらやい。」

「不見手よりか心太だい。」

又しても此の聲高に、はつとしたらしく、袖を翳して、若い妓は隠れたさうに、

「内證なのよ、ねえ、後生よ。姉さんに聞えると腹を立ちますわ。」

五

「何を云つてやんでえ。」

「分るもんか。」

矮小が抜からず、べろん、と出して、

「お前ン許の姉さんは、町内の狂人ぢやねえかよ。」

「其奴も怪しいんだせ、お夥間だい。」

と背後から喚くと、間近に、(何)とか云ふ鮎屋の路次口。鮎のやうにちよろりと出た同一腕白、下心あつて、用意の爲に引込むで居たらしい。芥溜を探したか、皿から攫つたか、笹ッ葉一束、棒切れの尖へ獨樂なはで引拾つた間に合はせの小道具を、さあ来い、と云ふ身で構へて、驅寄ると、若い妓の島田の上へ突着けた、ばさくばツさり。

が、黙つて、何にも言はないで、若い妓は俯向いて歩行き出す。

頸摺れに、突着け、突掛け、

「やあ、おいらんの道中々々！」

「大高、旨いぞ。」と一人が囁す。

「おつと任せの、千崎彌五郎。」

矮小が、心得、抜衣紋の突袖で、裾腰の露拂。早速に一人が喜助と云ふ身で、若い妓の袖に附着く。前後にづらりと六人、列を造つて練りはじめたので、あはれ、若い妓の素足の指は、爪紅が震へて留まる。

此妓不見手、と笹の葉の旗を立て、日本橋あたり引廻しの、陽炎揺るゝ影法師。

日南に蒸れる酢の臭に、葉も花片も萎えむとす。

引切の無い人通りも、凡そ途中で立停まつて、藝者の形を見物するのは、鰻屋の前に脂氣を嗅ぐ、奥州のお婆さんと同じ恥辱だ、と云ふ心得から、誰も知らぬ顔で行違ふ。……最も對手は小兒である。

世渡や爰に一人、飴屋の親仁は變な顔。叱言を、と思ふ頬邊を窪めて、もぐくと呑込んで、黙言の眉毛をもじや。若い妓は氣の毒なり、小兒た

ちは常得意。内心痛し、頗る痒しで、皺だらけの手の甲を願の下で摺つてござつた。

「川柳にもあるがね、(默然と辻斬を見る石地藏。)さね。…俺も弱つたよ。近い處が、西川岸にござらつしやる、ね、あの、目の前であつたらうづりや、お地藏様は何うお扱ひなされうかと、つくづく思つて居ましたよ、はい。……」

と後で人に然う云つた。又此の飴屋が、喇叭も吹かず、太鼓をトンとも鳴らさぬかはりに、何時でも廣告の比羅がはり、赤い涎掛をして居る名代の葎で猶ほ可笑い。

「笹や、笹々笹や笹、笹を買はんせ煤竹を——」

大高うまい、と今呼ばれた、件の(馴染めよし)が、笹を故と、島田の上で、ばさ／＼と振りながら、足踏をして唱出した。

聲を揃へて、手拍子で、

「笹を買はんせ煤竹を——」

此處で三音譜張上げる。氣障な調子で、

「大高原吾は橋の上え。」

檜木笠

第三

「あら、お止しなさいよ、そんな唄。大嫌だわ。二階に寐て居る姉さんが、病氣で疳が立つておいでだから、直ぐに聞きつけて、澤山加減を悪くするからね。…眞個に嫌なのよ。」

と若い妓は頭を振るやうに左右を顧る。

「何が嫌ひだい。」

「生意氣云ふない。」

「状あ！ 女郎奴、手前に嫌はれて幸だ。好かれて堪るかい。」と笹を持つたのが、ぐいと其の棹を小脇に引くと、呀、斜に構へて前に廻つた。

「嘘よ、お前さんぢやないのよ。其の大高源吾とか云ふ、ぶんぐりむつくりした人が、笹を擔いで浪花節で歩行いては、大事な土地が汚れるつて：日本橋は臺なし、堪らないつて姉さんが云ふんだわ。」

「知つてらい！」

と矮小が、べろ／＼と舌を吐いて、

「不斷、然う云やがるとよ、可か。手前ン許の狂女がな、不斷然う云やがる事を知つてるから、手前だつて尋常は通さないんだせ。僕がな、形を糞してよ、八百屋の小兒に生れてよ、間者に成つて知つてるんだ。行軍將基でもな、間者は豪いせ、伴内阿魔。」

商人は原より、親が會社員にしろ、巡查にしろ、田舎の小忤で無いものが、娘を苛める仔細はない。故あるかな、スバルタ擬きの小年等が、武士

道に對する義憤なのである。

「忠臣、義士の罰が當らあ。」

「勿論よ。」

ひよろ竹と云はれる瘠せたのが、きい／＼と軌む聲で、

「疾に罰が當つて、氣の違つた奴なんか構はねえや。：：此奴に笹葉を頂かせろ。」

「嘘をさしたれ。」

と含羞んだ若い妓の、揃つた目鼻の真中を狙つて、——お蝶の蟲が、もじやく／＼もじやく。

「へつくしよ。」と思はず唐突に陽炎を吸つて咽せた：：飴屋の地藏は堪らなさうに鼻を撫でる。

當の狙はれた若い妓は、はつと顔を背けたので、笹葉は片頬外れに肩へこつて、手を拂つて、持つたのを引拂はれて、飴の鳥はくしやん、と潰れ

る。

「可哀相に、鶯を。」

とつひ、衣紋が摺つて、白い襟。髪艶やかに中腰に成つた處を、發奮で一打、ト颯と鳥の翼の影、篋を擧げて引被る。

「あゝ、少時。」

慌しく聲を掛けて、白足袋のしよぼけた草鞋で、つかくくと寄らうとした、が、ふと足を曳いて、手甲掛けた手を差伸ばして、

「もし、大高氏、暫時、大高氏。」と大風に聲を掛けて呼んだのは、小

笠を目深に、墨の法衣。脚絆穿で、むかし傀儡師と云つた、被蓋の箱を頸

に掛けて、胸へ着けた、扮装は仔細らしいが、山の手の臺所でも、よく見

掛ける、所化か勸行か、まやかしか、風體怪しき鉢坊主。

形だけでも世棄人、それでこそ、見得も外間も洒落も構はず、變徹も無く、

途中で藝者を見て居らるゝ。——斜めに向ふ側の土藏の白壁に、へまむし、

と炭團の缺で樂書をした如くイむで、熟と先刻から視詰めて居た。

小笠のふちに、手を掛けながら、

「源吾どの、一寸、此へ……」

第四

「そりや、(かな手本)の御連中、彼處で呼んで居さつしやる。」

潮を踏んだ飴屋は老功。赤い涎掛を荷の正面へ出して、小兒の捌口へ水を向ける。

「僕の事かい。」

と猶豫ひながら、笹葉の竹棹を、素直に突いた下に、鬢のほつれに手を當て、をくれを搔いた若い妓の姿は、願の糸を掛けた状に、七夕らしく美しい。

「お前様方で無うて、忠臣藏が何處にあるかな。」と飴屋は頷くやうに願杖

を置いて言ふ。

「一所においでよ、皆。」

「おい。」

義士の人数六人の同勢は羽根のやうに、ほん／＼と發奮んで出て行く。

坊主は、笠ながら會釋して、

「貴殿は大高源吾どの？」

笠を持つたのが、(氣を着け)の姿勢に成つた。

「え、然うです。」

「此方はな。」

見向かれた、ひよろ竹は、何故か、ごし／＼と天窓を掻いた。

「僕は赤鞘の安兵衛てんです。」

「は、あ、堀部氏でおいでなさる。」

「千崎彌五郎だよ。」

と矮小は唇を、もぐ／＼と遣る。

「成程——其の他いづれもお揃ひでありますな。」

と六人をづらりと見渡し、

「いや、此は誰方も、はじめまして御意を得ます。」

こゝで更めて又懇懃に挨拶した。小兒等はきよとんとする。

中に大高源吾が、笠を覗込んで、前へ屈み、

「坊さんは誰なんです。」

「伶俐だな。何、天晴御會釋。如何さま、御姓名を承りますに、此方から

先へ氏素姓を申上げぬと云ふ作法はありませなんだ。しかし御覽の通り、

木の端同然のものでありますので、別に名告りますほどの苗字とでもあり

ませぬ。愚僧は泉岳寺の味噌摺坊主でござる。」

事實元録の義士扱ひ。で、言葉も時代に、丁重に、生真面目な應對。小

兒等は氣を取られて、此の味噌摺坊主に、笑ふことも忘れて浮りで居る。

「え、さて各自には、既に御本望をお遂げなされたのでありまするか。それとも、又今夜にも吉良邸へお討入りに相成りますか。」

小兒等は同じやうに顔を合はせて、猿眼に、猫の目、上り目、下り目、團栗目、いろ／＼なのが、ばちくるのみ。

自から名告つた味噌摺坊主は、手甲の手の腕組みして、

「は、あ、御思考最中と見えますな。いや、何にいたせ、貴方がたを義士の御連中とお見掛け申して、些と折入つて、お話し申したい事があります。餘り端近。な、此處は餘り端近で、それ／＼通りがりの人目も多い。も些と此へ、一寸向ふへ。あの四角の處まで、手前と御同道が願ひたい。

決して悪いことではありませぬ。さあ／＼誰方も。」

と云ふより早く、すた／＼と通りの方へ。

松屋あたりの、人通。何方が(端近)なのか其さへ分らず、小兒等は魅せられたやうに成つて、ぞろ／＼と後に續く。

電車が来る、と物をも言はず、味噌摺坊主は飛乗に翻然、と乗つた。で、其の小笠をかなぐつて脱いだ時は、早や乗合の中に紛れたのである。——白い火が飛ぶ上野行。——文明の利器も恚う使ふと、魔術よりも重寶である。角店の硝子窓の前に、六個の影が、ぼやりとして、中には鬚毛立つて、震へたのがあつた。

銀貨入

第五

地に碎けた餡の鳥の鶯には、何處かの手飼の、緋の首玉した小猫が、ちろ／＼と鐸を鳴らして擲んで轉戯れる……

若い妓の、仔細なく其處を離れたのは云ふまでも無い。と自から肩の嬌態、引合はせた袖をふら／＼と、臺所穿をはづませなが

ら、傍見らしく顔を横にして、小走りに驅出したが、歸りがけの四辻を、川岸の方へ突切らうとする角に、自働電話と、一棟火の番小屋とが並んで居る。……

ものも、憚う、新舊相競ふと、至つて對照が妙で、何うやら辻番附の東西の大關とでも言ひさうに見える。電話の方が(塗立注意)など、來ると愈々日當りに新味を發揮するが、油障子に火の番と書いたお定りの屋臺は、晝行燈と云ふ形。屋形船が化けて出て河童が住居ふ風情がある。註に及ばず、晝間は人氣勢もあるので無い。

其の兩方の間の、もの蔭に小隠れて、意氣人品な黒縮緬、三ッ紋の羽織を撫肩に、縞大島の二枚小袖。襲ねて着てもすらりとした、瘦せぎすで背の高い。油氣の無い洗髪。簪の突込み加減も、じれったいを知つた風。一目にそれしやとは見えながら、衣紋つき端正として、薄い胸に品のある、二十七八の婀娜なのが、玉のやうな頸を伸ばして、瞳を優しく横顔で、熟

と飴屋の方を凝視めたのがある。

「あら、清葉姉さん。」

と可懐しさうに呼掛けて、若い妓はバツタリ留まつた。

「お千世さん。」

と柳の眉の、面正しく、見迎へて一寸立直る。片手も細り、色傘を重さうに支いて、片手に白鹽瀬に翁格子、薄紫の裏の着いた、銀貨入を持つて居た。

若い妓はお千世と言ふ、それは稻葉家の抱妓である。

「お出掛け、姉さん。どちらへか。」

「否、歸途なの。一寸淺草へお参りをしたんです。——今ね、通りがりに見たんだけど、お前さん、飛んだ目にお逢ひだつたわね。」

「ええ。」

「でも、可かつたこと。私ね、見て居て何うしやうか知ら、と思つたのよ。」

「お千世さん。」

「は、」

と顔を上げて、甘へたさうに、ひつたり寄る。

「そして……：：：那の坊さんは知つた方。何なの、内へ勸化にでも来たことのある人なの。」

「否、些とも知りませんわ。」

「然う。」

「笠を被つておいでなすつて、顔は些とも見えなかつたんですもの……：：：でも、然うで無くツても、まるツ切、心當りはありませんよ。」

「然うね、それは然うだともね。」

清葉は何故か落着いて頷いた。

若い妓は、氣が入つて口早に、せい〜と呼吸をしながら、

「でもね、私、いぢめッ兒を、皆引張つて電車通りの方へ行つて下すつた

後姿を見て拜んだんですよ。私お地藏様かと思ひました。……：：：え。」

第六

お千世は、ばつちりとした目を瞬いて、

「館屋の小父さんは、鶯が壊れたから、代りを拵へて、而して持つて行けツて云つたんですよ。……：：：私、それ處ちや無いんですもの。歸つて姉さんに然う云つて、あの、西河岸のお地藏様へお参りに行くか、でなけりや、直ぐ、あの、お佛壇へお燈明をあげて拜みませうと思つて驅出して来た處なんですわ。」

「まあ、お千世さん。お前さん、大な態度をして館屋なのかね。私は蜜豆屋かと思つたよ。」

と細りした頬に唇を見せる、笑顔の其さへ、おつとりして品が可い。此の姉さんは、渾名を令夫人と云ふ……：：：十六七、二十の頃までは、同じ心

で、令嬢と云つた。敢て極つた旦那が一人、おとつさんが附いて居る、其の意味を諷するのでは無い。其間のせうそくは別として、爾き風采を稱へたのである。

序にもう一つ通名があつて、それは横笛である。曰く、清葉、曰く令夫人で可いものを、誰が詮索に及んだか、其の住居なる檜物町に、磨込んだ格子戸に、門札打つた本姓が(瀧口)はお詔で。むかし讀本の所謂(名詮自稱)に似た。此の人、日本橋に棲を取つて、表看板の諸藝一通恥かしからず心得た中にも、下方に妙を得て、就中、笛は名譽の名取であるから。

「あら……清葉姉さん酷いこと、何ぼ私かつて蜜豆を。立つて、往來で。」
「ほ、申過ごしました、御免なさいよ。否ね、實はね……小兒衆が、通せん坊をして、わやく、囃して居るから、氣に成つてね、密と様子を見て案じて居たの……あの、最つと此方へお寄りなさいよ。」
と、令夫人は仲通りの前後を、芝居氣の無い、娘じみた胸し方。で、件

の番小屋の羽目を、奥の方へ誘ひ入れつ、

「別にね、お前さんと話をして居るのを見られて悪い事は無いんだけど、人が通つて極りが悪いから。」

で、忍んだ梅ヶ香、ほんのりとする儂……勤めする身の、夏は日向、冬は日陰へ路を譲つて、真中を歩行かぬこと、不斷心得た女である。

「最う、あれだわ。誰か竹棹でお前さんの鬘を打たうとした時は、何うしやうかと思つてねえ。くづしたお寶が些と有るから、驅出して、あの中へ撒かうか知ら、と既の事……」

爲に銀貨入を手にしたので。

「口で留めたつて、宥めたつて、云ふことを利くんちやなし、喧嘩をするにも先方は小兒だし、と云ふ中にも、私は意氣地が無くつて、そんな氣には成れないし。お寶を撒くに限る。あんな兒に限つて、そりや屹と夢中に成つて、お前さんの事なんざ落ことして、お寶を拾ふから、と其のお前さん、

謀、計略？」

と打微笑み、

「そりや、お千世さん、可いけれど、私にや手が出せなかつた。意氣地が無くつて自分ながら口惜いのよ。……悪い事をするんぢやなし、誰に遠慮が、と思つても、何だかねえ、派手過ぎたやうで差出たやうで、ばつとして、唯恥かしくつて、何うにも驅出せなかつたの。」

まあ、極りの悪い。……銀貨入を握つた手が、しつとり汗に成りました。」

と其の鹽瀬より白い指に、汗にはあらず、紅寶玉の指環。點滴る如き情の光を、薄紫の裏に包むだ、内氣な人の可懐しさ。

第七

清葉は、きれの長い清しい目で、其の銀貨入の紫を覗いて見つゝ、

「お前さんの姉さんに聞かせたら、嘸ぞ氣が利かないつてお笑ひだらう。」
「否、姉さん。」

傍目も觸らず、清葉を凝視めて聞いたお千世が、呼吸が支えたやうに慙う云つた。

「でもね、娑婆氣だの、洒落だの、見得だの、何にも那樣故とで無しに、爲やうと思つて、直ぐ那の中へ、頭からお寶を撒ける人は、まあ、澤山ほかには無い。——お孝さんばかりなんだよ。」

稻葉屋の主、お千世の姉さん、暮から煩らつて引いて居る。が、錦繪のお孝として、人の知つた、素足を達手な婦である。

「折角お前さん、可い姉さんを持つて幸福だつたのに、」
と清葉は、もの寂しさうに、

「困るわねえ、病氣をして。」
「えゝ。」

お千世は引入れられたやうに返事して、二人の目の熟と合ふ時、自働電
話に備着の番號帳がバタリと鳴る。……前に繰つて見たものが粗雑に置
いたらしい、紐が摺つて落ちた音。

一寸目を遣つて見返しながら、

「そして、奈様な、矢張りお孝さんは相不変す？」

「え、困るのよ。二日に一度三日に一度ぐらゐ、一寸氣がつくんですけ
れど、直に夢のやうに成つて了ひますわ。」

「然うだつてねえ。」

「時々、嬰兒のやうなことなんか。今しがたも、ぶつきり飴と鳥が欲いつ
て、然う云つて、……」

と莞爾するのが、涙ぐむより果敢く見られる。

「あら、それで飴を買ひに。」

と云ひかけて、清葉は何か思出した面色して、

「お千世さん、今の、あの、味方をして下すつた坊さんね、……」
「え。」

「お前さん誰かに肖て居たとは思はなくつて、」

「肖て居て。誰に、え？……姉さん。」

「一寸あの……其だと、お前さんも、お孝さんも、私も知つて居る方な
んだがね。」

「然うでせう、ですから、私も屹と然うでせうと思ひましたわ。」

「まあ、矢張り、然うかねえ。氣の迷ひちやなかつたかねえ。」

清葉は半ば獨言に云ふと、色傘を上へ取つて身繕ひをする状して、も一
度あとを見送りさうな氣構へに、さら／＼と二返、襦を返して、火の番の
羽目を出したが、入交つて、前へ通さうとするお千世と、向を變へて又立留
まつた。時も過ぎたり、如何にしても、今は其の影も見えないことを心着
いたらしいのである。

「では、あの、姉さんは御顔を見たことがあるんですか。」

「私は、こゝで遠いもの。顔なんて、何うして？……お前さんは見たんぢやない？ 最も笠を被つて居なすつたけれどもさ。」

お千世は頻に瞬した。

「あら、姉さん、肖て居たつて、西川岸のお地藏様ぢやないんですか。私は直接に見たことはありませんけれど、……でせうと思ひましたから。で、なくつて、誰に肖て居ましたの、姉さん。」

「まあ、お千世さん、肖たつてのは其の事なの。……ぢや、矢張り、氣の迷だつたんだよ。」とうつかりしたやうに色傘を支く。

「否、氣の迷ひぢやありません。私は真個。」

「然うね、……折があつたら、お千世さん、一所におまゐりをしやうね。」

手に手

第八

「成程、蜜豆屋ぢや無かつたわね。」

飴屋が名代の涎掛を新しく見ながら、清葉は若い妓と一所に、お染久松が一寸戸迷ひをしたと云ふ姿で、火の番の羽目を出て、も一度仲通へ。何方の家へも歸らないで、——西川岸の方へ連立つたのである。

雖然、いづれ其のうち、と云つた、地藏様へ参詣をしたのではない。其處に、小紅屋と云ふ、苺が甘さうな水菓子屋がある。二人は並んで其の店頭。帳場に横向きに成つて、拇指の腹で、ばらりと帳面を繰つて居た。肥つた、が甲斐性らしい、圓鬚の女房が、莞爾目迎へたは馴染らしい。

「入らつしやいまし、……唯今お坊ちゃんがお見えに成りましたよ。」

「おや、然うですか、小婢がついて。」

と小さな服紗づゝみを一寸口へ、清葉は温容なものである。

「否、乳母さんに負ぶをなすつて、林檎を兩個、兩手へ。」

と女房は正面へ居直つて、膝にちやんと手を支いて、故と目を圓くしながら、圓々ちい括願で、頷くやうに襟を壓へて、

「懐中へ一つ、へい。」

と恍けた顔。此の大業なのが可笑いとて、店に突立つた出額の小僧は、お千世の方を向いて、くすりと遣る。

女房は念入りに尙一つ頷き、

「お土産の先廻り。……莞爾々々お歸りでございました。ですから最う今日は、お持ちに成るに及びません。眞個にお坊ちやんは水菓子がお好きで入らつしやいます事！」

お宅様の直き御近所に、立派な店がございますのに、難有い事に手前ど

もが御最負で。……小いお娘様も其の御縁で、學校のお歸りなんぞに、
 (小母さんお水を一杯。)なんて、お寄りなすつて下さいますし、土地第一の貴女方に御心安く願ひますので、房州出の田舎ものも、實にねえ、町内で幅が利きますんでございますよ。はい。」

「飛でもない、女房さん。何ですか、小娘までが、そんなお心安だてを申しますか、御迷惑でございますこと。」

「勿體ない、お蔭さまで人氣が立つて大景氣でございますよ。」

「お世辭が可いのねえ、お千世さん。」

「はあ、眞個に評判よ。」

「否、滅相な、お世辭ではございませんが、貴女方に譽められます處を、亡くなつた亭主に聞かして遣りたうございます。然ういたしましたら、生きてるうち邪慳にしましたのを嘸ぞ後悔することでございます。まかし又未練が出て、化けても出ると大變でございますね。」

お千世が襦袢の袖口で口を壓へて、一昨年せととしの冬ふゆなくなつた其その亭主ていしゆの、
聊いささか訛なまりのある假聲かゝいを使つかふ。

「松藏まつざうどんやあ。」

「わい。」

と叫まじんで、飛上とびあると、味柑みかんの空箱からばこを見事みごとに一個ひとつ、ぐわた、ぐわたんと引ひつ
轉覆くりかして、松小僧まつこぞうは帳場口ちやうばぐちへどんと退まがつて、

「女房おかみさん！」

「あゝ、驚おどろいた。何なんだい。」

不意打ふい打ちに吃驚びっくりして、女房おかみさんもぬツと立つて、

「何なんだねえ、お前まへ、大袈裟おほげさまな。」と立身たちみに頭あたまから叱しかられて、山姥やまうばに逢あつたや
うに、くしやくくと窘くぢんで、松小僧まつこぞうは土間どまへ蹲しゃがむ。

「見みたか、弱蟲よわむし。」

お千世おちせは白い脰ひざしをちらりと見みせ、細ほそい二の腕うでを輕かろく叩たたいて、

「可いい氣味きみさ。」

「何なんだね、お前まへさん。」と、餘所よその抱妓かかへでも、其處そこは姐ねえさん、他人たにんに氣兼きかねで
たしなめる。

「だつて、いつも人魂ひとたまの土藏どざうの處ところちや、暗くらがりで私わたしを威おどすんですもの。」

第九

「まあ、貴女方あなた、何どうぞ、まあ。」

女房おかみは立たつた序ついでに、小僧こぞうにも吩咐いひつけないで、自分じぶんで蒲團ふとんを持出も出して店端みせはな
の縁臺えんたいに——夏なつは氷こほりを賣うる早手廻はやてましの緋毛氈ひきもせん——餘あまり新あたらしくは無ないのであ
るが、向むかふ側がはが三間さんげんばかり忍返しのびがへしの着きいた黑板くろいた塀べいなのと、菓くだもの、艶つやをか
ぶせたので、埃ほこりも見みえず綺麗きれいである。

「否いえ、すぐにお暇しよまを。——お千世おちせさん、何なにが可よからうねえ。」

「濟すみません、姉ねえさん。」

とお千世は瞬きで禮を言ふ。

清葉は乃し方、火の番小屋から、直ぐに分れて歸らうとして、其の銀貨入を、其れごととお千世の帯の間へ挟みつゝ云ふのに――

「あの、極りが悪いんですがね、お前さんのために使はうと思たのを、使はないで済んだんです。お金子だと思はないで、お千世さん。」

「まあ、何故？」

「小兒に苛められたお見舞に。」

お千世は、生際の濃い上へ、俳優があひゞきを掛けたやうに、其の紫の裏を頂いたが、手へ返して清葉の其の手に、絶るが如く顔を仰いで、

「姉さん、此のお寶で、私をお座敷へ呼んで下さいな……些とも私、此の節かゝつて来ないんですもの。」

土地の故參で年上でも、花菖蒲、燕子花、同じ流れの色である……生意氣盛りが、我慢も意地も無いまでに、身を投げ掛けたは、よくせき、

と清葉はしみじみ可哀に思つた。

「菊家へ行かうよ、私がお客で。大したお大盡だわね、お小遣を持扱つて。と故と銀貨入を帯に納めて、

「途中で我まゝな馴染に逢つて無理に連れられたと然うお云ひな。目と鼻の前だつて、一旦家へ歸つてからだ。川岸の鮎は立食しても座敷にはきちやうめんな、極りの堅いお孝さん。お化粧だの、着換だので、つひ其のまゝではお出であるまい……私も五時からお約束が一つある。早いが可いわね。一寸此の自働電話で、内へ電話をお掛けなさい。一所に行つて御飯を食べやう。」

「姉さん。」

といそく爲ながら、果敢さうに、

「最うね、内に電話は無いですよ。」

清葉は思ひがけず疑ひの目を睨つて、

「何うして、ねえ。」

「お孝姉さんは如彼でしやう。私は滅多に御座敷はありませんし、あの……。」

とお千世は言淀んだが、
「鑑札のお代だつて餘計なものなのに、電話なんか無駄だからつて、それで、譲つて了つたんでせう一昨日から。内にはボン／＼時計も無いんでせう。ですから、チンリンと云ふ音もしないで、寂莫ぼかんとして居るんですわ。」

方々、お茶屋さんだの、待合さんへ、然う云つておいでつて云ふんでしやう。——私がづゝと廻りましたの。

姉さん。——はじめてお弘めに連れられました時よりか。私極りが悪かつたんです。……だつて、唯、(あゝ然うですか御苦勞様。)つてお言ひなされる許は可んですけれども、中にはねえ、(何うして。)つて。否、冷評すんぢやありません、深切で聞いて下さるお家では、(私が些とも出ませんから。)然う言はなけりや成りませんもの。爲う事なしに、笑つて云ひにや云ひましたが、死ぬほど辛うござんしたわ。」
と指を環にしつ、引靡けつ。

第十

寐起の顔にも、鬢の亂れは人に見せない身躰。他人の縫れ毛も氣に成るか、一つ座敷の年下など、小蔭で撫着けて遣る外には、客は固より、身體に手なんぞ、觸つたことの無い清葉が、此の時は、確乎首筋でも抱きたさうに、お千世の肩に手を掛けた。

「まあ、お孝さんが廻れと云つて？」
「否。」

と驚いたやうに頭を振つて、

「私の姉さんが、そんな事……病氣から以來、内の世話をして居る叔母さんのいひつけなんですよ。」

稻葉家のお孝が、然うした容體に成つてから、叔母とは云ふが血筋ではない。父親は臺灣とやら所在分らず、一人有つたが、それも亡くなつた叔父の女房で、蒟蒻島で油揚げの手曳をして居た。餘り評判のよくない阿婆が、臺所から跨込んで、帳面を控て切盛する。其奴の間夫だか、田樂だか、願髻の凄まじい赤ら顔の五十男が、時々長火鉢の前に大胡坐で、右の叔母さんと對向に成ると、茶棚傍の柱の下に、櫛巻の姉さんが、棒縞のおさすり着もの、黒縹子の腹合せで、襟へ突込んだ懷手、婀娜に悄乎と坐つて居るのが毎度と聞く。可哀さうに、お千世は御飯炊から拭掃除、阿婆が寢酒の酌までして、ちびりくと苛められる上、収入と云つては自分一人の足りない勝で、すぐにお孝の病氣の手當に差響くのに氣を揉んで、言ひ憎からう。我が口から、

「若千金でも。」と待合の女中に囁く。

不思議な事は、禍だか、幸だか、お孝の妹分と聞いたゞけで、其の向きの客人は、一目も置いて三舍を避けて、白でも稻葉家では後日が、と敬遠すること、死せる孔明活ける仲達を走らす如し。従つて些とも出ない。その爲に、阿婆の寐酒は尙ほあくどい。あはれがつて、最惜がつて、住替を勧めても、

「私が出ますと姉さんが。」

とお孝を案じて辛抱する。其の可愛さも知れてゐる。其だのに、お千世に口の掛からない時は、宵から、これは何だ、と阿婆が茶の鐘の鉢力を、指で弾いて見せると云ふまで、清葉は聞傳へて居るのであつた。

電話さへ無い始末、内證も偲ばれる……あの酒のみが、打切飴。それも欲しい時は火のつくばかり小兒に成つて強請るのに、買つて歸れば既う忘れ、袋を見やうともしないとか。病氣が病氣の事であるから、誰の顔の見

さかへも有るまいが、それにしても大分の不沙汰をした……お千世のためには、内の様子も見て置きたい、と菊屋へ連れやうとした氣を替へて、清葉はお孝を見舞ひに行くのに、鮎と云ふのも狂亂の美女、附屬もの、笹の氣が悪い。野暮な見立ても、萎るゝ人の、美しい露にもなれかすと、ここに水菓子を撰んだのである。

小紅屋の女房揉手をして、

「稻の家さんへ。えゝゝ、直に、お後から持たせまして。」

小僧合點して、忽ち出額に蛸願卷。

引摺るほどに其の奴が着た、半纏の印に、稻穂の圓の着いたのも、それか有らぬか、お孝が以前の、派手を語つて果敢なく見えた。

二人は引返して、又、あの火の番の前へ出たが、約束事で、も有る如く、揃つて立停まらなければなら成かつたのは、一町たらず川岸寄りの向ふ側、稻の家の其處が露地の中から、蜥蜴のやうに、のろりと出て、ぬつと怪し

げな影を地に這はした、服装は、しよびたれて薄汚れて、廣袖かと思ふ、袖口も綻びて下つたが、嚴丈づくりの、づんと背の高い。目深に頬被りした、草鞋穿で、裙を端折らぬ、風體の變な男があつて、懐手で俯向いて、此方へのさゝくと來掛つた、と見ると、ふと頬被りの裡の目ばかり……其處に立留まつた清葉たちを見るや否や、ばねで弾かれたかと思ふ、くると背後向。方角をかへて川岸通へ、然ものそゝと着流しのぐなりとした、角帯のづれた結目をしやくつて行く。

出て來た處が稻の家の露地であるだけ、お孝に憑いたあやかしと思ふ可厭な影の、角の電信柱で、フツと消えるまで、二人は、ものをも言はず見送つて居たのである。

露地の細路

第十一

昔と語り出づるほどでも無い。殺された妻の怨恨で、血の流れた床下の土から青々とした竹が生へる。筈の(方に非ず)妻さを何にたとふべき。五位鷺飛んで星移り、當時は何某の家の土藏に成つたが、切つても拂つても亡執は消失せず、金網戸からまざぐと青竹が見透かさる。近所で(お竹藏)と呼んで恐をなす、白壁が町の表。小兒も憚るか樂書の痕も無く、朦朧として暗夜にも白い。

時々人魂が顯れる。不思議や鬼火は、大きさも雀の形に紫陽花の色を染めて、ほとくと軒を傳ふ雨の雫の音を立てつゝ、棟瓦を傳ふと云ふので。小紅屋の奴、平の茶目が、わッ、と威して飛出す、とお千世が云つたは

其の溝端。——稻葉家は眞向ふの細い露地。片側立四軒目で、一番の奥である。片側は角から取廻はした三階健の大構な待合の羽目で、其の切れ目の稻葉家の格子向ふに、小さな稻荷の堂がある。傍に、總井戸を埋めたと云ふ、扇の芝ほど草の生へた空地があつて、見切は隣町の奥の庭。黒板塀の忍返して突當る。

其處に紅梅の風情は無いが、姿見に映る、江一格子の柳が一本。湯上りの横櫛は、薄暗い露地を月夜にして、お孝の名は何時も御神燈に縁點滴るばかりであつた。雖然、此處の露地口と、分けて稻の家の其の住居とに、少なからず、ものゝ陰氣な風説がある。

以前、仲之町の聲妓で、お若と云つた媚かしい中年増が、新川の酒問屋に旦那が出来たため、色を賣るのは酷い法度の、其の頃の廓には居られな義理に成つて場所を替へた檜物町。

里に馴れた吾妻下駄、からころ左袂を取つたのを、其のまゝぞろりと青

疊に敷いて、起居に蹴出しの水色縮緬。達手巻で素足と云ふ藝者家の女房。むかし古石場の寄子ほど、藝者の數を二階に抱へて、日本橋に芽生への春。若菜家の盛を見せた。夏の素膚の不斷の紹明石、眞白に透く膚と、もに、汗もかゝない帯の間に、いつも千圓束が透いて見えると、出入りの按摩が目を剥いたのが、其の新川の帳尻に、柳の葉の散込むのが秋風の立つはじめ。金氣蕭條として忽ち至る殺風景。やけでお若は浮氣をする、紐がつく、鳶が搦む、蜘蛛の巣が軒にかゝる、旦那は暴れる、お若は遁げる。追掛廻して殺すと云ふ。

手切話しに、家を分けて、間夫をたてひく三度の勤めに、消え際が又榮えた、おなじ屋號の御神燈を掛けたのが、即ち此の露地で、稻葉家の前が其である。

お若と云ふのは、一輪の冬牡丹を尻に咲かす間もなく、其の家で煩らひついて、所謂勞症の、果はどつと寐て枕も上らないやうに成ると、件の間

夫の妹と稱する、奚ぞ知らん品川の女郎上り。女で食ふ色男を一度食はせたことのある、臺の鯨のくされ縁が、手扶けの介抱と稱へて入り込むで、筆筒の抽斗を明けたり出したり、引解いたり、鉄を入れたり。勝手に臺所を搔廻はした擧句が、やれ、刺身が無いわ、飯が食はれぬ、醬油が切れたわ、味噌が無いわで、皿小鉢を病人へ投打ち三昧、摺鉢の當り放題。

第十二

お若の身は火消壺、螢ばかりに消え残つた、可哀に、美しく凄い腫に、自分のを直して着せた瀧縞お召の寝衣を着た男と、……：不斷じめの未だ残る、服紗帯を、あらう事か、占めるは未だしも。しやら解けさして、四十歳宿場の遊女どの、紅入友染の長襦袢。矢張り、勝手に拜借ものを、垂々と見せた立膝で、長火鉢の前にさしむかひに成つた形を、世に有るものとも思はなかつた、地獄の繪かと視めながら、涙の暗闇のみだれ髪、ば

らりとかゝる白い手の、掴んだ拳に俯伏せに、魂は枕を離れたのである。
 が、姿は雨に、月の朧に、水髪の横櫛、頸白く、水色の蹴出し、蓮葉に
 捌く裾に揺れて、蒼白く燃える中に、何時も素足の吾妻下駄。うしろ向に
 成つて露地口を、カラ／＼と踏んで、五つばかり聞こえてフツと消える。
 も一度から／＼と響くと思ふと、若菜家の格子のカタンと開く音。
 極つて、同じ姿が、うしろ向きに露地口へ立つて、すいと入ると途中で
 消えて、あとは下駄の音ばかりして格子が鳴る。
 勿論、開いたでもなければ、誰も居ない。……此を見たもの、聞いた
 もの。

やがて風説も遠退いて、若菜家は、格子先の其の空地に生へる小草に名
 をのみ留めたが、二階づくりの意氣に出来て、たゞの住居には割に手廣い。
 ……こゝで、一度待合に成つた處、開店の晩に、酔つて裏二階から庇
 合へ落ちて、黒塚の忍返しにぶら下つて、半死半生に大怪我をした客があ

つて、すぐに寂れて、間もなく行衛知れず其は引越す。

一度、勤人の堅氣が借りて、此は無事。たゞし商館通ひであつたが、旅
 順とやらの支店の方へ勤がへに成つて貸家札。

時に二割方屋賃をあげた。近所では驚いた。差配の腹は大きかつた。

すぐに引越し蕎麥を大蒸籠で配つたのが、微酔のお孝であつた。……
 抱妓が五人と分が二人、雛妓が二人、それと臺所と婢の同勢、蜀山瓦とし
 て阿房宮、富士の霞に日の出の勢。紅白粉が小溝に溢れて、羽目から友染
 がはみ出すばかり。芳町の前の住居が、手狭と成つて、こゝに鏡臺の月を
 移して、花の島田を纏めたものが。

三年にして現時の始末。

最も中頃、火取蟲が赤いほど、御神燈に羽たゞきして、頻に蛞蝓が敷居
 を這ふ、と云ふ頃から、傍では少なからず氣にしたもの、年月過ぎた事
 でもあり、世間一體不景氣なり、稻の家などは揚りのいゝ方。取り立て、

言出して、氣にさせても詮ない事と、土地で故顔のお茶屋の女中、仕上げて隠居分の箱屋なども、打出しては言はなかつた。

却つて川岸の客などに、場所も所説も、よく知つて、——中には見たのがあると云ふ——酒の座敷で威かし半分、

「歸りに摺違ふよ、露地口で。」

とまで打撒けるものは有つても、勝氣氣嵩の左褌、投遣りの酒機嫌。

評判な人ね、あやかりたいわ。」

で、粹な音と聞こえた美聲。

露地の細路……駒下駄で……

と得意の一節寂莫とする。——酔へば蒼く成る雪の面に、月がさすやうに電燈が沈むや。

「宵然。」

と知つた同士が囁き合つて、威した客の方が悚然とする。……

露地の細路……駒下駄で……

「お孝、それだけは堪忍しな。」

つむじ曲りが娑婆氣な、故と好事な吾妻下駄。霜に寒月の牙ゆる夜の、

更けて歸る千鳥足には、殊更に音を立て、カタ／＼と板を踏む。

顔の見える時はまだしもである。

朽ちた露地板は氣前を見せて、お孝が懷中で敷直しても、飯盛さへ陣屋

ぐらゐは傾けると云ふのに、藝者だものを、と口惜がつても、狭い露地は

廣く成らぬ。

車は通らず、雨傘も威勢よくボンと轆轤を開いたのでは、羽目へ當つて

巾つたいので、湯の歸りにも半開、春雨捌きの玉川翳。

美人の此の姿は、淺草海苔と、洗髪と、お俠と婀娜と、(飛んだり刎ねた

り)も一寸交つて、江戸の名物の一つであるが、此の露地ばかり蛇目傘の

下の柳腰は、と行逢ふものは身の毛を悚立て、鶯の聲の媚めいて濡れた

のさへ、晝間も時鳥の啼く音を怪む。

柳に銀の舞扇

第十三

鐘さへ霞む日は閑に、眉を掠める雲は無いが、薄りとある陽炎が、ちらりと幻を淡く染めると、露地を入りかけた清葉は、風説の吾妻下駄と擦違ふやうに、悚然とした。

清葉は實際、途中でも、座敷でも、廊下でも、茶屋の二階の上り下り、箱部屋などでも、丁ど、袖袂の往通ひに、生きて居た頃の幽霊と、擦違つて知つたのであるから。――

此處まで引添つたお千世は、家の首尾を見る爲か、あるじまうけの心着けか、ものも言はないで、一足前へ、袖を振つて驅出した。格子の音はカ

ラ／＼と高く奥から響いたけれども、幸に吾妻下駄の音では無くて、色氣も忘れて踏鳴らす臺所穿の大きな足音。それさへ頼母しい氣がするまで、溝板を辿れば斧の柄の朽ちるばかり、漫に露地が寂しいのである。

並んで四軒、稻葉家の隣家は目下空屋で、あとの二軒も、珍らしく藝者家では無い。

片側の待合の其の羽目に、薄墨でぼかしたやうに、ふらくくと、一所に歩行いて、附いて来る影法師。

清葉は例の包ましやかに、色傘を翳して居た。其の影と分つたが、フト氣に成るので、其處で窄めて、逆上るばかりの日射を除けつゝ、袖屏風する如く、怪いと見た羽目の方へ、服紗づゝみを頬にかざして、徐に通る襪はづれ、末濃に藤の咲くかと思えつゝ。

さて音信るゝ格子戸は、向ふへ間を措いて、其處へ行く手前が、下に出窓、二階が開いて、縁が見える。

「お孝さん。」

と不慮に心易く、其れなり聲を掛けるのには、二人の間は疎遠でないが、いづれも名取りの橋の袂、双方對の看板主、藝者同士の禮儀があるので。一步とまつて、二階か、それとも出窓の内か、と熟と視めて、恚う、仰いだ清葉の目に、色糸を颯と投げたか、とはらりと映つて、稻妻の如く瞳を射つ、沈んで輝く光があつた。

驚いた鬢のほつれに、うしろの羽目板で、ちら／＼と一つ影が添つて、重つた蒼い影。

優しいながら、口を締めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人の云ふ——若衆質の細面の眉を拂つて、仰向いて見上げた二階の、天井裏へ、翻然と飛ぶのは、一面、銀の舞扇である。

第十四

晃乎と光ると、扇は沈んで影は消えた。

……が、又翻つて颯と揚羽。輝く胡蝶の翼一尺、閃く風に柳を誘つて、白い光も青澄むまで、塵を拂つた表二階。

露地も温室のやうな春の中に、其處に一人月の如き美人や病む。扇に描いたは、何の花か、淡い繪具も冷たさうに、床の柱に映るのが見える。

落ちる、と丁と幽な音。あの力なさは足拍子で無い。……疊に這つた要の響。日ざしの白い静かさは、深山櫻が散るやうである。

障子を左右に開け放して、見透かされたる其の座敷に、櫛子隠れの肩も見えず、欄干にこぼる、裳も見えぬ。
お孝はまさしく寢て居るのである。

寝ながら、舞扇のお手玉して、千鳥に投げて遊ぶのであつた。

「あゝ、多日逢はない……」

清葉は、又可懐しさが身に染みた。……軒の柳の翠も浅い、霞のやうな簾一枚、ちき其處に、と思ふのが、氣の狂つた美人である。……寝ながら扇を……

又飛ぶ扇、閃めく影、影に重る屏の影。

何故か渾名の（錦繪）に魂の通ふ不思議な友に、夢現に相見る氣がして、清葉は軽く胸が轟く。

扱て恚う云ふも咄嗟の事。

直ぐに格子を音づれかけたが、歩みも運ばないで、立淀むだ。

清葉は途端に、内で、がみくと喚く聲を聞いたから。

「遅いぢやないかね。」

と云ふ、腹がれた中に癪の交じつた、冷飯に砂利を噛む、心持の悪い聲

で、のつげに先づ一つくらはせた。

續いて、

「眞晝間、……お尻を振廻はして歩いたつて、誰も買手は有りはしな

いや。……鶯、鶯、」

と茶色な齒、尖つた口も見えろと思ふと、

「鶯につゝかれるくらゐが落なんだよ。何處、何、お茶、お茶、何處へお

茶を買つて來、」

と一寸途絶える。

お千世は飴を買つたのに。

「何だ、飴だえ。私は又お前さんの身のもの、賣買ともにお茶だと思つた。……然う飴を、お茶うけに、へとむ、」

と笑ひ上げたは、煙草を吹いたぞ。

「矢張りお茶に縁が有らあね、……世間ぢやお天道様と米の飯は附いて

廻ると云ふけれど、お前さんにや、貫水とお茶がついて廻るんだ。お茶の水は本郷の名所だつけ。日本橋にや要らないもんだ。

え、姉さんのだ、嘘を吐き。……否、姉さんが又吩咐けたつて、口ばかりさ、直ぐに忘れて、きよとんとして居る事は知つてるぢやないか。そして、食べさしちや悪いんだ。狂女に食ものツてね、むしやく食散らかされて堪るものかな。

食べると水膨んだよ。……あの上水膨れちや、御當人より傍のものが助からないよ。人が乾殺しでもするやうに、蔭へ廻つちや出過ぎたがる。姉さんも又人聞きの悪いほど何だ彼だつて食べたがる。精々何にも當飼はないで、咽喉腹を乾しとかないと、此の上また何かの始末でもさせられるやうぢや何うすると思ふんだ。

清葉は睫毛に露を押へて、二階の陽炎の光るのを見た。扇は澄まして舞ふのである。

第十五

清葉は格子へ音訪れかねた。

自分と露地口まで連立つて、一息前へ驅戻つたお千世を捉へて、面前喚くのは、風説に聞いたと違ひない、茶の鐘を敲く叔母であらう。

悪戯兒の悪關係から、火の番の立話、小紅屋へ寄つたまで、一寸時間が取れて居る。晝間近所へ振賣だ、と云ふ。そんなお尻は鳶の突くが落だ、と云ふ。お茶と水とは附いて廻る、駿河臺に水車が架つたか、と云ふ。

お千世さんは私が一所に此處へ来たことを云つたのだらうか。……言つて、そして聞えよがしに、悪體を吐くとすると、私に喧嘩を賣るのか知ら。何の怨みも無いものが、煩らふ人の見舞に來たのに、如何に分らずやの叔母だと云つて、まさか然うした事ではあるまい。露地から急いで、……あのお千世さんが心づかひ、臺所から長火鉢、二階を跨に掛けて、眼

張つて居る、ものがもの……姉さんは姉さんゆるる。客に麓末の無いやうに、と先觸れに驅込むだ處を、頭から喚き立て、あの妓が呼吸を吐いて、口を利く間も措かず、立續けて饒舌るらしい。

其れにしても、汚い口から出過ぎた悪體。お千世も同じ、藝者はお互ひ。筆がしらでも中軸でも一味についた連名の、晝齋がお尻を突く、駿河臺の水車、水からくりの姉さんが、こゝにも一人と、飛込まうか。

それには用意がなければならず、覺悟もしないちや出来まいが。自分へ面當なら破れかぶれ。お千世へだけの事だつたら、蔭で綻を縫ふまで、と内氣な女が思直す。

また其の時、異う悪黙りに黙つて了つて、ふと手の着けられぬまで、格子の中が寂莫して、薄氣味の悪いほど静まつた。

此ぞ、お千世の客が来て、門に近いのを、漸と囁き得た事を領かせる。「えい」。

咳を優しくして、清葉が出窓際の柳の下を、格子へ抜けやうとする、と恰も其の時。

はらりと音して、寝ながら投げる扇が逸れたか、欄干を颯と掠めて、時繪の波がしら立つ如く、淺翠の葉に掛つて、月かと思ふ影が揺ぐと、清葉の雪のやうな頬を照らす……と思はず、受けたは服紗の手。我知らず色傘を地に落して、其の袖をはつと掛けて、斜めに丁と胸に當てた。

清葉は前刻から見詰めた扇子で、お孝の魂が二階から抜けて落ちたやうに、氣を取られて、驚いて抱取る思ひが爲たのである。

潜つて流れた扇子の餘波か、風も無いのにさらりと靡く、青柳の糸の縫れに誘はれた風情して、二階にすらりと女の姿。

お孝は寢床を出た扱帯。寛い衣紋を迂るやう、一枚小袖の黒繻子の。黒いに目立つ襟白粉。薄いが顔にも化粧した……何の心ゆかしやら——よう似合ふのに、朋輩が見たくても、松の内無いと見られなかつた——潰

島田の艶は失せぬが、鬢のほつれは是非も無い。

生際曇る、柳の葉越。色は抜けるほど白いのが、淺黄に銀の刺繡で、此が達手の、渦巻と見せた白い蛇の半襟で、幽に宿す影が蒼い。

第十六

唯……思つたほどは寢れも見えぬ。

病氣の爲に失心して、娑婆も、苦勞も女も忘れたか、不斷年より長けた女が、却つて實際より三つ四つも少いくらゐ、つひに見ぬ、薄化粧で……分けて取亂した心から、何か氣紛れに手近にあつたを着散らしたらう……座敷で、お千世が何時着る、紅と淺黄と段染の麻の葉鹿の子の長襦袢を、寢衣の下に襪淺く、ぞろりと着たのは、——豫て人が風説して、氣象を較べて不思議だ、と言つた、清葉が、優しい若衆立で、お孝が凜々しい娘形、——宛然の其の娘風、艶に媚かしいものであつた。

お孝は弛んだ達手卷の、ぞろりと投遣りの裳を曳きながら、……踊で鍛へた褌は亂れず、白脛のありとも見えぬ、蹴出捌きで、すつと来て、二階の縁の正面に立つたと思ふと、斜めに其處の柱に凭れて、雲を見るか、と麻合を恍惚と仰いだ瞳を、蜘蛛に驚いて柳に流して、葉越しに瞰下ろして、其處に舞扇を袖に受けて、見上げた清葉と面を合はせた。

「あゝ、お孝さん。」

と聲を掛ける。

上で見詰めたなり、何にも言はず、微笑むらしいお孝の唇、紅をさしたやうに美しい。

其處へ、あとも締めないで置いたと見える。開けたまゝの格子を潜つて、顔を出したお千世は、一杯目に涙を湛へて居る。

亂れて咲いた欄干の撓な枝と、初咲のまゝ、悄れむとする葉かぐれの一輪を、上下に、中の青柳は雨を含むで、霞むだ袂を扇に伏せた。

「清葉さんは樂勤め。」と茶屋小屋で女中が云ふ。……時間過ぎの座敷などは、(お竹藏)の棟瓦に雀が形を現はしても、此の清葉が姿を見せた験が無い。……替りには、刻限までだと、何時に口を掛けても、本人が氣にさへ向ければ、待つ間が花と云ふ内に、催促に及ばずして、金屏風の前に衣紋を露す。

但し約束は享けて居ても、参詣の歸途に眩暈がすると、其のまゝ引籠ること度々で。此の眩暈と、風邪、と、も一つ、用達と云ふ断りが出る、と箱三の札は、裏返らないでも、電話口の女中が矢續早の弓弦を切つて、断念めて降参する。

座敷で口惜しがるもの曰く、

「旦那が來て居るのだらう。」

勿論である。

時に説を爲すものあり。

「其のくらゐなら商賣を止めれば可い。」

難じ得て妙だと思ふと、忽ち本調子の聲がして、

「藝者がすきな旦那でせうよ。」

一言簡潔にして更に妙で、座客ぐうの音も出ず愕然として此を見れば、蓋し三味線が、割前の一座を笑つたのである。

然まで我儘が通る癖に、附合が綺麗いで、朋輩に深切で、内氣で、謙遜で、もの優しい。をくれた座敷は、若い妓の後背に控へて、動く處は前へ立つて目立たないやうに取廻す、と云ふのであるから、お茶屋の藏の前に目の光る古狸から、新道の峙を巢立ちの雛兒まで、

「あゝ、いゝ姉さん。」

とのつげに云ふ。……續いて頭を振る所科ありと知るべし。少いもの慌てまい。其の頭を振る事たるや、今のは嘘だと云ふ打消しではない。

向ふへ對手に廻はしては、三味線の長刀、扇子の小太刀。立向ふ敵手の無い、芳町育ちの、一步を譲るまい、後を取るまい、稻の家のお孝が、清葉ばかりを當の敵に、引くまい、退くまい、と氣を揉むで、負けじ、とするだけ、豫て弱身なのであつた。

張も、意地も、全盛も、藝は固より敢て譲らぬ。否較べては、清葉が取立て、勝身は無い。

分けて彼方は身一つで、雛妓一人抱へて居らぬ。

此方は、盛りは四天王、金札打つた獨武者、羅生門でも、土蜘蛛でも、狒々も狼も以つて來なで、萌黄、緋緘、卯の花緘、小櫻を黄に返したる年増交りに、十有餘人の郎黨を、象牙の擗に従へながら、寄すれば色ある浪に碎けて、名所の松は月下に獨り、從容として名を得る口惜しさ。

弱蟲の意氣地なしが、徳とやらを以て人を懐ける。雪の中を草鞋穿いて、養着て揖讓をするなんざ、惚氣けて鍋焼を奢るより、資本のかゝらぬ演劇だもの。

「字は玄徳め。」

と所好な貸本の講談を讀みながら、梁山泊の扈三娘、お孝が清葉を罵る、と洩聞いて、

「其の氣だから、あの妓は、(そんけん)さ。」

と内證で洒落た待合の女房がある由。

却説、言ふが如く、清葉の看板は瀧の家に唯一人である。母親がある。其は以前、同じ土地に聞えた老妓で、清葉は其の實、養女である。學校に通ふ娘が一人。これには表むき、おつかさん、とおほびらに自分を呼ばせて、誰に遠慮も氣づかひも無い。

尙ほ水菓子が好きだと云ふ、三才に成る男の兒の有ることを、前の條に

一寸言つたが、此は特に斷つて置く必要がある、捨兒である。夜半に我が軒に棄てられたのを、拾ひ取つて育て、居る。其の兒に乳母を選んで、附けて置く裕な身上。

土藏がある、土藏には、何かの舞に使つた、能の衣裳まで納まつたものである。

嘗て山から出て来た猪が、年の若さの向ふ不見、此の女に戀をして、座敷で逢へぬ懷中の寂しさに、夜更けて瀧の家の前を可懐しげに通る。と其處に、鍋焼が居た。

荷の蔭で引飲けながら、フト其の見事な白壁を見て、其の藏は？

「瀧の家で。」

「たきの家？」

「へい、清葉姉さんの内だけですよ。」

や、これを聞くと、雲を霞と河岸へ遁げた。然も霜冴えて星の凍てたる

夜に、其の猪が下宿屋の戸棚には、襲ねる衾も無かつたのであつた。

と、何の苦勞も、屈托も無さうな其の清葉が、扇子と、ともに、身を震はした。

聲もうるんで、

「お千世さん、姉さんが。」

と、二階にイむで、もの言はぬお孝を、其の妹に教へながら、お千世の泣顔を、ともに誘つて、涙ぐんだ目で欄干を仰いで、

「私……私よ、お孝さん。」

と二度目に呼んで聲を掛けるや、

「葛木さん。」

と、冴えた聲。お孝が一聲應ずると、ともに、崩れた襦は小間を落ちた、片膝立てた段鹿の子の、淺黄、紅、露はなのは、取亂したより、蓮葉とより、薬玉の總切れぐに、美しい玉の緒の縫れた可哀を白々地。萎えたや

うに頬杖して、片手を白く投掛けながら、

「葛木さん。」

二度まで、同じ人の名を、此處には居ない人の名を、胸を貫いて呼んだと思ふと、支えた腕が、溶けるやうに島田髷を頂せて、がつくりと落ちて欄干に突伏したが、忽ち反り返るやうに、衝と立つや、踏跟々々として障子に當つて、亂れた袖を雪なす肱で、緊乎と胸にしめつゝ、屹と瞰下ろす目に凄味が見えた。

「あゝ。」

「危いわ、姉さん。」

端近な低い欄干。虹が消えさうな立居の危なさ、と見ると、清葉が落した色傘を拾つて居たお千世が、小脇に取つたまゝ、慌しく驅込んだは、梯子を一飛びに二階へ介添。

「何だい、盗人猫のやうに、唐突に。」

と摺違ひに毒氣を浴びせて、ぬつと門口を覗いた、遣手面の茶鐘阿婆。「えへ。」と笑ふ、茶色な前齒、金の入齒と入亂れて、窪んだ頬に白粉の残滓。

「まあ、瀧の家のお姉様、何うぞ此方へ。……まあ、御全盛な貴女様が、こんな怪物屋敷見たやうな處へ、まあ、何うした風の吹廻しで。」

「一寸、お茶を頂きに。」

河童御殿

第十八

「はゝあ、葛木ですかね、姓ぢやね、苗字であるですね。名は何と云はるゝですか。」

「晋三です。」

上外套を着ながら尙ほ蒲柳の見える、中背の男が答へる。

三月四日の夜の事であつた。宵に小降りとした雨上り、月は潜んで朧、

と云ふが、黒雲が浸んで暗い、一石橋の欄干際。

一方は口つきでも知れる、言ふまでもなく警官である。

「新は何う書くですかね、……：通例新の新ですか？ 或は。」

「晋と云ふ字です。」

と男は聲を低うした。こゝに事故ありと聞きつけて、通行の人集りを憚

つて、然り氣なく知合が立話でもする如く装はうと爲たらしい。

然して氣遣ふ事は無い。近間に、大な建築の並んだ道は、崖の下行く山

道である。峯を仰ぐものは多いけれど、谷を覗くものは澤山ない。夜は特

更往來が少い。然も、其の夜は、丁ど植本店の執持薬師様と袖を連ねた、

こゝの縁結びの地藏様、實は延命地藏尊の縁日で、西川岸で見初て植本店

で出来る、と云つて、宵は花簪、蝶々鬘、やがて、島田、銀杏返、怪しか
らぬ圓鬘まじり、次第に鬘の出た、襟脚の可いのが揃ふ。派手に美しく賑
ふのである。それも日本橋寄から中通へ掛けた般賑で、西川岸橋を境にし
て此方の川筋は、同じ廣重の名所でも、朝晴の富士と宵の雨ほど彩色が變
つて寂しい。最も此一石橋の夜の御領主、名代の河童が、雨夜の影を潜め
たのも、漸つと五六年以來であるから。

初夜も過ぎた屋根越に、向ふ角の火災保険の煉瓦に映る、縁結びの赤い
燈は、恰も奥庭の橋に居て、御殿の長廊下を望むで、障子越の酒宴を視め
る光景！ 島田の影法師が媚めくほど、尙ほ世に離れた趣がある。

偶にこぼれて出て来るのは、小姓梅之助に手を曳かる、腰元の青柳か。
密と外づして酔ざましの椎茸鬘。いづれも人目を忍ぶ色の、悪くすると御
手討もの。巡查と對向に立つたのなんぞ、誰も立停まつて聞くものは無い。
夜は、間遠いので評判な、外濠電車のキリ／＼軌んで通るのさへ、池の

水に映つて消える長廊下の雪洞の行衛に擬ふ。

が、名を憚つた男の、低い聲に、(あゝん)と聞えぬ振して、巡査が耳を傾けたのは、故とらしく意地悪く見えた。

「すゝむ、所謂、進歩ですかね。」

「否——高杉晋作の晋なのです。」

と向直る。

巡査の背がぐつと伸びて、じろりと行つて、

「維新創業の名士、長州第一の英傑ぢやね。あゝ、豪い名前でありますな。

ふん。」

「親がつけたんです。」

と苦笑したらしい。

「成程、大きに其處もあるですね。」

と取つても附かない氣振をしながら、

「で、晋三の藏の字は？……いや、名刺をお持ちぢやらう、と考へるですがね。」

「確か……有りました。」

爾時、角燈を焼と見せると、其手で片手の手袋を取つて、目前へ、づい、

と掌。目潰もくはせる構。で、葛木といふ男は、ハツと一足さがつた。

「差上げますので？」

「何、拜見をしますので、はあ、あゝ。」

第十九

巡査は、持替へた角燈に、頬骨高く半面暗く、葛木の名刺を指の股に挟んで、

「此は非常に緻に成つとる名刺ぢやねえ。」

「つひ突込んで置いたもんですから。」と袖の下に、葛木は其名刺入を持つ

て居る。

「あゝ、非常に大事のものと見えるですね。」

「巡査は鼻の先でニヤリと薄笑。」

「此の意味が受取れなくつて、」

「えゝ？」と云ふ。

「深く其の、囊底に秘して置くですね。」

「何、然う云ふ次第では無いんです。いけ粗雑なんです。」

「粗略に扱ふですか。故とですかね、名刺を。」

「故と、と云ふのぢやありません。皮肉ぢやありませんか。」

「敢て然うで無いです。が、貴下の言語が前後不揃であるからぢやね。」

「何が不揃です。」と一寸忙込む。

「お黙りなさい。」

と低いが唐突に一喝して、けろりと又静に、

「反問をすることは要らんです。……唯、質問に對して答へれば可いのです。」

「ぐい、と名刺入を突込んだが、葛木は事を好まぬらしく其のまゝ黙る。」

「巡査はじろりと四邊を見た。」

「早く願ひたいのです。」

「順序があります。——一體此の名刺はですな、……更めて尋ねるですが、」

「確に、此は貴下のですな。」

「名が書いてあります。葛木晋三と。」

「本郷駒込が住所で。」

「相違ありません。」

「すると……皺だらけに成つた、此の一枚而已ではありますまい。他に」

「幾枚か持合せがあります。有る筈ぢやがね。」

「はあ。」と浮りした返事をする。

「其をお見せに成らんけりや不可んね。」

「生憎、持合せがありません。」

「無いと云ふ法は無い。有る可きですね。」

葛木は、此さへあれば、何事もない、と自覺したのに、實際無いのを口惜しさうに、も一度名刺入を出して、中を苛立つて搔廻はしたが、

「真個、一枚に成つて居たのです。」

「成程……非常に交際がお廣いですね。」

「否、狭いんです。」と投げたやうに、言下に答へる。

「こゝに醫學士、と記てあるですな。」

「巡查は魔を射る赤い光を、葛木の胸にびたり。」

「其の髯の薄い頤を照らした。」

「お職掌から、特に御交際の狭いといふのは……ですな、何故ですかね。」

「開業は爲て居らんです。」

幾干か、頷いたらしかつた、と更まつた態度で、

「何處へお歸りですな。」

「學校へ。」

「何、」

「……其寄宿へ歸ります。」

「は、あ、學士の寄宿舎が。其は唯今ありますか。」

「醫局に居ります。」

「今時分。」

「其處に寝泊りをするんです。」

「すると、此の駒込千駄木は？」

「籍が有るんです。」

「何故ですか、籍だけお置きに成るは、……ですね。」

「妹の縁着いた家なんです。」

「御令妹の、ふん。」

と一つ呼吸を入れたが、突着けた燈も引かず。

「で、唯今まで、何處においで有つたのかね。」

「此の邊に、一寸飲んで居りました。」

其處へ、二人ばかり通抜けたが、誰も立停まつても見なかつたのである。

第二十

「何屋下す、何屋ですかね。」

「其は言はなければならぬでせうか。勿論是非となら、申すんです。」

「いや、其は先づ……然し御愉快でしたな。」

「何、苦痛です。」

と向を替へで、欄干に凭れて云ふ……

「苦痛……成程。道理で、顔色が非常に悪いな。」

忽ち亂暴な言語しながら、横ざまに其の瘦せた形を照らして、

「真蒼ぢやね、は、は、は。」

と笑棄てたが、底に物ある、薄氣味の悪い事。

其の時間えた。糸より細い忍音の

——露地の細路駒下駄で——

「あ、……可厭な……姉さん。」

と若い女の聲がすると、かたくと驅出す音。呉服橋を、や、離れた辻

のあたり。薄墨色の川岸を傳つて、雲より黒い線路に響いた。トも一人笑

つた女の聲。悪巫山戯に威したらしい。登音は續いて響く。

葛木は撈るやうに顔を撫で、

「蒼青ですか……然うですか。客が野暮だから、化物に逢つた飯途でせ

うよ。」

「其は、唯今の其は、苟も行政官の一員たる、即ち本職に向つての言語で

あるのですかね。」

「否、實は性分です。」

と焦つたさうに、言ひ切つた。葛木は衝と行かうとした。表裏、反覆、兎に角ながら、對手が笑つたから、話は濟んだ、と思つたのである。

「お待ちなさい、お待ちなさい。待たんか、おい。」

「何です。」

「づか／＼行つちや不可んぢやないか。尋問は此からなんだ。」

「僕は帽を取るよ。更めて挨拶をします。可加減にしくつち困るぢやありませんか。夜分、我々が通行するのに、恚う云ふ事は間々あります。迷惑でも御職務に對して敬意を表する。其にしてもです。唯今までさへ、立入過ぎたお尋ねの被成方ですが、……單に御熱心であるからだ、と思つたんです。」

此の上何を聞くんです。眞個可加減にして下さい。……用が有るなら住

所へお尋ねを願ひませうか知らん。」

「然やう、當方の都合に因つては住所へもお尋ね出来ます、又：都合によつては本署へ御同行も出来得るですであらう。」

「え。」

有繫に葛木は一驚を吃した。餘の事である。

「雖然、御答辯によつて、其處までに立到らない事を、紳士のために、本職は欲するでしてな、はあ、あ。」

「早くお尋ねを願ひます。何です、兎に角、困りました。僕は不安に堪へません。」

「すると寧ろ此處で埒を明ける事を御希望に成るのですね。」

「勿論、是が非でも連れて行かうと思へば、其が出来ない貴下ぢやないんだから。」

「然やう。然らば反抗をなさらんで、柔順にお答へをなさるが可い。」

と入交ひに成つた向を直して、巡査は半身を反るが如く、肩を聳かして衝と又角燈を突附けた。

葛木は、其の忌はしさと、痲癩にぶるつとする。

「貴下は太く其の顔色が悪いですね。」

「……寒いのです。」

「寒い！ 化物に逢つたのが、性分に成つて、而して今は寒い。いろくに變化しますな。」

「まあ、君は、と足踏で橋を刻むで焦れると、

「御都合で署へ御同行を願つても可いのです、が、御答辯によつて、其れまでに立到らない事を、紳士のために、希望しますでなあ。」

「……………」

榮螺と蛤

第二十一

「何にしろぢやね、本職の前で顔色が悪うて、震へて居らるゝのは事實ぢやね、其は併し寒いでも構はんです。」

其の寒いのにぢやね……前刻から、水に臨んで、橋の上に、此處に暫時立つて居たのは、あつや何う云ふわけですか。

勝手だ、酔覚ぢやと言はるゝかも知れん。雖然ぢやね、見つて居つたぞ どぶん！と音のした……」

水の面は暗かつた。
「どぶん。」

ぎり／＼と靴を寄せつゝ、

「川の中へ放棄し込んだ……確に新聞紙に包んだ可なり重量の有るものは、あれは何ですか。」

「あゝ。」

前の世の罪でいもある事か、と自から危ぶみ、惶れ、惑ひ、且つ怪んで居た葛木は、餘りの呆氣なさに却つて驚いたのである。

「其の事ですか。」

「先づそれを聞かんとならんですね。」

「あれは榮螺と蛤ですよ。」

此が又少なからず這個行政官を驚かした。……其の答が餘り簡單で明瞭で加に平凡であつたから。……雖然、此の場合の平凡たるや、世間の名詞は、巡査の爲には盡く平凡であつたらう。

巡査に取つては、魚河岸の俠男が身を投げたよりは、年の少い醫學士と云ふ人間の、水に棄てたものは意外であつた。

「榮螺と蛤。」

問返す、鼻柱かけて著しく眉を潜めた、疑惑の眼は異變に光る。

「貝類の……です。」

「いや其は否、其は然しながら初めは妖怪の符牒でいもあるかに聞いたですが、再度繰返して説明をされたで、貝類であることは分つたです、分つたですが……貴下は妙なものを棄てましたなあ。」

「放したのです、私は。」

「成程、で其は禁厭にでも成るですかね。」

「……雛に、雛壇に備へたのを、可哀相だから放したんですよ。」

「はゝあ、或は煮、或は焼いた奴を。」と故と空惚けた事を云ふ。

うっかり引入れられさうだつた。が、對手が巡査である事に、彼は漸く馴れたのである。

「生のまゝですとも。」

「何等の目的ですかね。」

「目的は有りません。」

「人間が、紳士が、苟くも學士の名稱御所有の貴下、が目的なしに、目的なしに事を行ふと云ふ理由はあるまいかに考へるですね。」

「醫學士は思はず激した。」

「根、根掘り葉掘り。」

「御都合に因ればです、本署へ御同行を願ふことも出来るです。が、紳士として、御名譽にですな。」

「分つた。：：分りました。が、別に目的と云つては無い。可哀相だからなんです。」

「：：蓋し非常な悲善家でおありですな。成程、所謂、醫は仁術であるですかね。」

「私は敢て、敢て仁者とは言ひますまい。妹の、姉の。」

「あ！」と一つ握拳を口に突込むが如く言を遮る。

ト稍しどろの體で、

「姉さんの志です。」

「姉さんの志、は、あ、君は姉のために、嬰兒を棄てたんぢやね。」

「何！」

第二十二

「前刻には御令妹であつたかに、あ、本職は記憶するですな。」

「然うです、然うなんです。」

「何か、年上の妹かね。」

「否、姉です。」

「答が明瞭を缺いて、不可んねえ……爲に成らんぞ、君。」

「ですから僕の妹です。」

「は、は、駄目ぢやね、君、何うも變ぢやね。」

「何が變ですか。」

「都合に因つては本署へですな。」

「馬鹿を仰有い！」

「けれども、紳士のために、敢てそれは望まんのですなあ。」

「實に、貴下は。」

「誰が雛を飾つたですか。」

「其は僕だ。」と赫となる。

「おい、」

と云ふ語調が變つて、

「確乎答辯をせんと不可んねえ、君は、今しがた、……某大學ですかね、病院に寄宿をすると言つたでは無かつたか。……大學、病院の宿舍内で、雛を飾つて遊ぶのですな。榮螺、蛤を備ふるですな。」

「如何にも。」

「事實は、……本職が、貴下を疑ふよりも、寧しろ奇怪ぢや無いですか。」

「其が姉の志ですから。」

「御令妹は、」

「妹は縁着いて、千駄木に居るのです。」

「分りました。」

「はじめて僅に頷きながら、」

「姉と云ふのは、ですな。」

「其まで、そんなことまで凡て言はなければ成らんのですか。……詮方がない、災難と思ふ……御都合に因つては、それは何處へもお供をする。が、打明けてお聞かせ下さい。一體、何から起つたお疑なんですか。」

「聞かせませう。川へお棄てに成つたものを、明かにお話しが願ひたい？

……」

「其は、」

「は、矢張り（榮螺と蛤か、其奴は困りましたな。」「お信じ下さらない。」

「強ひて信じたくないとは願はんのです、紳士のために。何爲、那樣なら貴下は、其の新聞包みを棄つるに際して、きよろ／＼四邊を响したり、胡亂々々往來をしたんぢやね。」

「そりや何です、人が怪しみはしまいかと思つたからです。」

「は、あ、人が怪むと云ふ事を。それぢや……御承知であつたですな。」

「ものが、ものだからですから。」と大にまごつく。
「何も貝類を川に棄つるに、世間を憚る事は無いやうに思はれる……ですな。」

「ですが、……又……貴下のやうな。」

「すると、本職がです、警官が其を怪む事は御承知の上ですか。」

「僕には分らん。」

「本職はです、貴下のために御答辨の拙劣なのを惜むです。」

「……勝手にし給へ。何うしやうてんだ。」

「……紳士のために望まない事ですな。」

「煩い、勝手になさいよ。」

「爲に成らんぞ！」

「旦那。」

と暗がりに媚かしく婀娜な聲。ほんのりと一重櫻、カランと吾妻下駄を、赤電車の過ぎた線路に遠慮なく響かすと、はつと留楠木の薫して、臙を透かした霞の姿、夜目にも襖を咲かせたのは、稻の家のお孝であつた。

—— 一 昨年の春である ——

おなじく妻

第二十三

「もし、一寸。」

右側の欄干際に引添った二人の傍へ、すらりと寄つたが、お端折の袂を
取りたさうに、左を投げた袖ぐるみ、手をふらくと微酔で。

「旦那、其方のお検べはまだ済みませんか。」

と斜めに警官を見て、莞爾り笑ふ……：：：：皓齒も見えて、毛筋の通つた、
潰島田は艶麗である。

警官は二つばかり、無意味に續けざまに咳した。

「お前は何かい、あゝ。」

「はあ、お次に控へて居りました、賤の女でござんすわいな。」とふらく

する。分つたか、分らないか、別に心にも留めない様子で

「何が故に、あゝ、出チ来たかい、うむ？」

「唯々、御意にござりまする。」

と妙に可愛い聲して、

「此のお方の、」

が流盼に、ト心あつてか葛木を優しく見ながら、

「お検べが済みませんと、後が支へますのでござんすわいな。」

「何が支へる、何が。」

「だつて——あゝ焦つたい。此方は何ぢやありませんか——御姉さんの志
だつて、お雛様に御馳走なすつた、お定りの（榮螺と蛤）……：

でもお儀式よ。それを貴下、川ン中へお放しなすつたつて、其がでしや
う、怪しいつて事なんせう。

もし、榮螺も蛤も生きて居ますわ。中でもね……：：：：お雛様に飾つたのは、

ちら／＼蠟燭の煮えます時、春雨の静かな晩は、口を利くものなन्दすよ。
クク」

と酸漿を鳴らすが如く、

「なんて。——可哀相に、蒸したり焼いたり出来まつかつて貴下——おまけにお雛様んでしやう——此の方の心意氣は、よく分つてるぢやありませんか。」

私だつて放しに來ました、見て下さいな。」

片手を添へて、捧げたのは、錦出の中皿の、半月形に破れたのに、小さな口紅三つばかり、裡紫の壺二個……其の缺皿も白魚の指に、紅猪口の如く蒼く輝く。

巡查も葛木も腫を寄せた。

「あら、小さいんで極りの悪い事ね……お價が高いもんですから、賤の女でござんすわいな。ほ、ほ、ほ。」

桃の花片其處に散る、貝に眞珠の心があつて、雛を懐ふ風情かな。

「お座敷歸に、我家の門から、奴に持たして出たんですがね。途中で威かしたもんだから、押放して遁げたんですもの。ヒヤリとしたわよ、眞二つ。身上大痛事。此を拾ふ時の拙者が心中、心持と云ふものは、御兩所、御推量下されい。」

其でも、孝の字大達引。……ねえ、そんな思ひをして迄だつて、放しに來たんぢやありませんか。ねえ、現在。」

と左右を見つゝ、金魚鉢を覗く如く、仇氣なく自分も視めて、

「お分に成つて、旦那。……お許しを受けないと、又叱られると成りません……最う可いでしやう、一寸、放しますよ。」

巡查の、ものも言はない先、つか／＼と欄干越。

「一石橋に桃が流れる。どんぶりこ。」
ばつと鳴つて、どどどんと、水の音。

両手を絶つて、肩を細く乗出しながら、

「河童や、悪戯をおしでないよ。」

向ふ岸に鶯が居て、雲はやゝ白く成つた。

「失禮しました。」

名刺を返して、

「悪しからず……お名前だけ記憶します。」

と、鉛筆で手帳へ其の名を……振向くお孝に見向つて、

「お前の名も……何と云ふかい。」

「おなじく妻、とかいて頂戴。」

第二十四

「實に難有かつた、姉さん。」

巡查の靴音が橋の上に留んで、背後向の其の黒い影が、探偵小説の挿畫

のやうに、保險會社の鐵造りの門の下に、寂しく描出された時、歎息と、
もに葛木は然う云つた。

「お庇さまで助つたんだよ。」

「恐入ります、御懇懃で。」

並んでイんで見送つて居たのが、微笑んで見向いてお孝。

「でも、驚いたでしやう、貴方。」

「驚いたつて。はじめは申戲だと思つたし、半頃ちや、故と意地悪るくす
るんだと思つて癢にも障りましたがね、段々眞面目なのに氣が着いたんで
す。確に嬰兒でも沈めたと思つたらしい。先方が職務に忠實なんだと氣が
着くほど、一度は警察か、と覺悟をしてね——まあ、玄かし其でも活きた
證據に、同じもの、放生會があつて、僕が放生會に逢つたやうだ。で、眞
個に不思議なくらゐだ。」

「私は毎年放すんですわ。」

「それにした處で、丁ど機會よく、……私は姉の引合はせか、と思ふ。」
「御馳走様。」

と横を向いた、片頬笑みの後れ毛を、男に見せて、婀娜に拂ひ、
「清葉姉さんの、でしやう一寸。」

「え、？」

「お驕んなさいよ、葛木さん。」

「驕る……そりや屹とお禮をするがね、何うしてお前さん、私の名を。」

「知つて居ますよ。」

「吾妻下駄をからりと鳴らして、摺下る襦袢を上衣の下に直した氣勢。」

「今お歸り？ 清葉さんの葛木さん。」

彼は退いて片手を振つた。

「止してくれ、先方が迷惑をするんだから。」

「酷く、御謙遜ね。」

「否、真個。」と慌しく中折をぐいと被る。

お孝は覗くやうにしながら、

「それとも、此からお出掛けなさるの。……宵にして下さいよ。然うでない、私たちが見たくつても廊下で御目に掛れない。」

「申戯を云つちや困る……此から行つて逢へるやうなら、橋の上で巡査に捉まる、そんな色消しは見せやしない。……」

なんのツて呑氣らしく云ふけれども、實際行掛けに流した方が無事だつた。雀と違つて、ものがものだし、一寸嵩は有るしするから、宵の人目を憚つたのが、蟲が知らしたのかも知れんのだね。真個に此から歸るんだよ。」
「ぢや、矢張りお歸りがけね、お待ちなさいよ。」

と抜出て居た簪を、反らした掌で、スツと留めて、

「然うね……姉さんの御志で、お雛様の榮螺と蛤を、一石橋から流すと云ふのに一人ぼつち。それまで檜物町に差向ひで居た藝者が、一所に着い

て来ない意氣ぢや、成程出来て居ませんね。」

「勿論。」と外套の襟を立てる。

「それぢや風説の通りだよ。」

「や、専ら風説をするのかい。」

「評判さ。お前さん。」

「其は聊か情ない。」

「意氣地なし……。」

と杖を投げた手を襟に、眉を明るく屹と見て、

「男の癖に。」

「此は手酷い！」

第二十五

「だけでも、可氣味ねえ。」

「何の怨みだね。」

「可いもの好みをするからさ。」

相濟みません。」

葛木は寂しく笑つて、

「猛烈なる事巡査以上だ。」

「處へ……私でなく、清葉さんに出て貰ひたかつたわ。」

「其の人でさへ、可いかね、都合のいゝ時で無いと、容易に顔も見せちや

くれない……。」

「澤山よ。」と一轉と背後向く。

「否、見得も外聞も無しにさ。分けて、お前さんは全盛だ。名だけは評判

で聞いて居る。……此の頃に一度挨拶、と思ふけれど、呼んでも一寸ち

や見えんのだらうな。」

「見えるも見えないも、葛木さん、御挨拶なんて要るものですか。」

「屹と然う云ふだらうと思つた。勿論、たかく更めて、口で云ふ禮ぐらゐ。」

「却つて迷惑。」

「御迷惑。」と口も足も、學士は蹴躓いたやうであつた。

お孝は濟まして、

「え、眞平。」

「それぢや時節を待つて下さい。」

「可厭です。」

學士は決然たる態度で、一寸帽を取つて、

「名は忘れませんよ、いづれ。」と二ツ三ツ塵をはじきながら、附穂なく線路を斜めに、見えない電車に追はるゝ如く。

唯顧みて、其處で、と被直して、杖をついた處、お孝は二ツばかり、カラ／＼と吾妻下駄を踏鳴らした。

「唯別れるの、……不意氣だねえ、——一石橋の朧夜に、」

四邊を見つゝ袖を合はせた、雲を漏れたる洗髪。

「女と二人逢ひながら、すたく（かねやす）の向ふまで、江戸を離れる男ツてのがお前さん江戸にありますか。人目に然うは見えないでも、花のやうな微醉で、こゝに一本咲いたのは、稻葉家のお孝ですよ。清葉さんとは、違ひますわ。」

「違ふから、其だから、」

學士は、つか／＼と引返して、

「尙の事、忙しくつて、逢つてはくれまいと言ふんぢやないか。」

「え、然うよ、……違ひますとも、……清葉さんと違ふのはね、今時分から一人ぢや貴方を返さない事なのよ。」

「お孝さん。」

「葛木さん、もう遅いわ。……電車も無し………巡查に咎められたりな

んかして、こんな時はつけが悪い、山の手の夜道だもの、無理をすると追剥がれますよ。」

「最も、直ぐにも、挨拶も爲たいんだけれど、遅い、ね、何しろ遅いから何處と云つて……私は働が無いのでね。」

「着いてるのが私です。——箱を出たお嬢さんだわ、お座敷は何處にでも。一寸……一所に行らつしやいな。」

と取つて引いた外套の脇を離すと、トンと突いて、ひらりと退くや、不意に踰躍めく葛木を、すつと立つて、莞爾見て、

「其時、屹と御挨拶なさいまし。ほうし。」
と花やかものである。

「姉さん。」と抱着くやうに腰にひつたり、唐突に驅寄つたは、若い妓の派手な態度、當時一本に成りたてだった、お孝が秘藏のお千世なのである。

「まあ、千世ちゃんか、……あ、吃驚するぢやないか、ねえ。」

第二十六

「だつて、姉さん。」

「姉さんぢやないよ、……唐突に何だねえ、お前、今しがた川岸の角から驅出したぢやないか。」

——露地の駒下駄——は、此の婦で、怯えた聲は其の妓であつた。

「緩り歩行しても追着いて來ないから、内へ歸つたらうと思つたのに。」

「だつて、姉さん、姉さんが威すんですもの。私吃驚して遁出しましたけれど、(お竹藏)の前でしやう、一人ぢや露地へ入れませんもの、可恐くて、私……」

「煙草屋の小母さんに見てお貰ひなら可いものを。」

「最う閉りましたの。」
と、小腰を屈めて、欄干の上で、ふつくりした鬢を庇つた透して見る手、

——橋の側は變つて居た。

「……………覗いたけれども、眞暗で、最う寝たんですもの。」

「それで何かい、また出掛けて来たのかい。」

「え、一人ちや可憐いんですもの、……………でも此方がまだしもですわ。」

「なんて、お前、お約束だもんだから、歸りに縁日へ廻つて、何か買はせやうと思つてさ。さあ、行かうよ……………貴方一所に——千世ちゃん御挨拶をおしでないか。」

「——失禮。……………お初に、」

「お初ぢやないよ。……………貴方、此の妓は御存じだわね。」

「兩三度——千世ちゃんだつけ。」

「あら、濟みません、……………誰方。」

と絶り寄るやうに、外套の襟を覗いて、

「まあ、清葉姉さんに岡惚れの、」

「謝誤まる。」

と俯向けに、中折帽ぐるみ顔を壓へて、

「何とも面目次第も無い！」

「……………清葉命……………と顔に書いてあるやうだわね、口惜いね、明い處でよく見て遣らうや。」

「何處へ行く氣なんです。」

「縁結びに……………西川岸のお地藏様へ。」

肩でトンと寄添ひつゝ、

「分つたでせう、貴方、此の妓には遠慮は要らない。千世ちゃん、御覽、似合つたかい。」

「あら、姉さんは？」

「お孝さん。」

「(同じく妻)だわ。……………雛の節句のあくる晩、春で、臈で、御縁日、同

じ榮螺と蛤を放して、巡查の帳面に、名を並べて、女房と名告つて、一所に参る西川岸の、お地藏様が縁結び。……これで出来なきや、日本は暗

夜だわ。」
肩に掛つた留南奇の袖。

お孝を掠めて腕車が一臺。

「危え。」

矢の如し。

「おや、おいでなすつたよ……」

——露地の細路、駒下駄で——

細く透つて凄い聲する。

「可厭、姉さん。」

「それ、兄さんにおつかまり。」

飛つくお千世を葛木に絶らせて、ひとり襦袢を舉げて、悠然と前へ立つて

「大丈夫、然うすりや、途中で誰かに逢つても安心でせう。」

葛木は、扱兼ねたか、故と不答。

「千世ちゃん、お前寒くは無いかい。」

果せる哉、此の一行は、それから参詣を済まして歸りがけに、あの……

……仲通りで、一人軒傳ひに、包ましく來かゝる清葉に、ゆくりなく出逢つたのである。

横槩賦詩

第二十七

「今晚は……清葉姉さん。」

「清葉姉さん、今晚は。」

然うした事も、渾名を令夫人など、呼ばるゝ箇條であらう、柔かな毛皮

の襟巻を、雪の細面蔽ふまで、深々と巻いて居る。……上衣無しで、座敷着の上へ黒縮緬の紋附の羽織を着て、胸へ片袖、温容に褌を取る、襲ねた裳しつとりと重さうに、不斷さへ、分けて今夜は、何となく、柳を杖に支かせたい、すんなりと春の夜風に送られて、向ふから来る姿。……手をとられ、三人つれたり、箱屋と並んで通るのこの薄彩色した陽炎が臙に顯はれた風情の連中が、行違つたり、出會つたり、大勢の會釋するの、間の隔つた時分から、——西川岸の露店の裸火を、ほんのりと背後にして、軒燈明の寐静まつた色の巻に引返す、——此の三人の目に明かに見えたのである。

「あれだ、玄徳……」
見ても分る。清葉の其の土地子に對して、徳と位と可懐味の有るのに對して、お孝は口の中に呟いた。

「千世ちゃん、お放しでないよ、……葛木さん、横町へなんか躲しては

卑怯なことよ……」

「何が可恐くつて遁げるものかね、悪い事をした覺は無い。」

「唯、口説いて見たばかりだッてね。」

「そしてだ、美事に刎ねられたから可いぢやないか。」

「嘘ばかり、口説けもしないんぢやありませんか。」

「それも、評判かい。」

「先ね。」

「否、破れ、被れ、何を隠さう。言出すまいとは思つたけれども、凡夫の

浅間しさにつひ、酔つた紛れに。」

「おや。」

「が、酒の勢を借りて、と云ふのが、打明けた處だらう——然も今夜——頭から恐入らされたよ。」と、もう一呼吸、帽子を深草、簀より外套は見窄らしい。

此は蓋し事實なのである。

お孝は、一足前立つた、身を開いて、鈴を張つたやうな瞳に一目凝視めて一寸領きながら、

「隠さず、白状をなすつたから、私がかまつて行くのは堪忍して上げます。……打棄つた清葉さんも豪いけれども……」

で、立直つて凜とした聲、

「拾ひ手が立派です。……威張つて居らつしやい。そんなに可恐がる事は無いわ。」

「否、恐れはせん、が、面目ないのだよ。」と窘まるばかり襟に俯向く。

齊しく俯向いて、莞爾々と笑つてばかり、黙つて、ついて歩いた、お千世が、衣の氣勢にそれと知つて、真先に、

「今晚は、」

「おゝ、千世ちゃん。」

所謂口説いて刎ねられたと云ふ戀人に、然も同じ夜。突落された丸木橋の流に逆らつて出逢つたのである。葛木は次の瞬間を憂慮つて、靴の先から冷く成つた。

お孝が、横合から、

「御参詣ですか、清葉姉さん。」

「は……」

と、行違つて、温容に見返りつゝ、

「姉さんて、可厭ですよ、ほゝゝ、人が悪いわ。」

とすつと通つた。

知らぬ振か、實際それとも、面を蔽ふたので認めなかつたか、心着かない様子で通過ぎたの、トお千世が袂を曳いたのに、葛木は宙を行くやうに、うかくと思はず別れた。

お孝

「姉さんて、可厭ですよ、ほゝゝ、人が悪いわ。」

第二十八

「ちよッ、玄徳め。」

と、投げたやうに、袖を拂つて、拗身に空の雁の聲。臙を仰いで、一人立停まつた孫權を見よ。英氣颯爽として穿る槊を横へて詩を赤壁に賦した、白面の曹操の慨がある。

前へ行く二人の影に、其の透る聲で、此方から、
「通越し。」

と浴びせたのは、稲葉家の我家へ曲る火の番の辻であつた。

すぐに、カタ〜と追絶つて、

「千世ちゃん、清葉さんの長襦袴を見たかい。」

「えゝ、可いわねえ。」

「色が白くて、髪が黒い處へ、細りしてるから、よく似合ふねえ。年紀よりは派手なだけけれど、娘らしく色氣が有つて、まことに可い。葛木さん、一寸、彼處へ惚れたんぢやないこと。」
「馬鹿な。」

「でも可いでせう。」

「長襦袴なんか、……些とも知らない。」

「まあ、長襦袴を見ないで藝者を口説く……それぢや暗夜の礫だわ。だから不可いんぢやありませんか。今度、私が着て見せたいけれど、座敷で踊るんでないと一寸着憎い。……口惜いから、此の妓に拵へて着せませうよ。」

やがてお千世が着るやうに成つたのを、後にお孝が氣が狂つてから、ふと下に着て舞扇を弄んだ、稲葉家の二階の欄干に青柳の絲とゝもに亂れた、縋る玉の緒の可哀を曳く、燃え立つ緋と、冷い淺黄と、段染の麻の葉鹿の

子は、此の時見立てたのである事を、一寸此處で云つて置きたい。序に記すべき事がある。それは、一石橋から此の火の番の辻に来る。途中で清葉に逢つた前。縁日は最う引汐の、黒い渚は掃いたやうに静まつた川岸の側で、さかり場からはづくと下つて、西川岸橋の袂あたりに、其處へ其の夜は、紅い涎掛の飴屋が出て居た。

が、其では無い。

櫻草をお職にした草花の泥鉢、春の野を一缺かいて來たらしく無雜作に荷を積んだのは歸り支度。踵を臂の片膝立。すべりと兀げた坊主頭へ綱目の立つた手拭の向願卷。圓顔で頬皺の深く口の大きい、笑ふと顔一杯に成りさうな、半白眉の房りした爺さま一人、かんでらの裸火の上へ煙管を俯向け、灰吹から狼煙の上る、火氣に翳して、スパクと吸つて、涎掛の飴屋と何か云つて、アハ、と罪も無げに仰向いて笑つた、……其の顔を此方で

見ると、葛木に寄繩つて、一石橋から來たお千世が、

「あゝ、お爺さんが。」と云ふと齊しく、振拂ふやうにして驅出したのであつた。

「可愛いわね。」

其を透かして、寫繪の樂屋の如き、一筋のかんてらに、顔と姿の寫るのを、故と立淀んで、お孝が視めて、

「ねえ、一寸……生意氣盛りの、あの時分ぢや、朋輩の見得や、世間への外間で、抱主の臺所口へ、見すぼらしい親身のものゝ姿が見えると、つんと起つて、行きもしないお稽古だの、寐坊が朝湯へ行き兼ねないのに、大道唯中、（お爺さん。）——えゝ、お千世は那の人の孫なのよ——可愛ツちやないのねえ。」

羆の筒袖

第二十九

「阿爺どの、阿爺どの。」

「はい、私かねえ。」

橋から橋へ、河岸の庫の片暗がりやを遠慮らしく片側へ寄つて、賣残りの草花の中に、蝶の夢には、野末の一軒家の明窓で、かんでらの火を置いた。荷は軽さうなが、前屈みに、てくく歸る……お千世が爺の植木屋甚平、名と願卷は娑婆氣がある。

背後をのさくと跟けて来て、阿爺どの。——呼聲は朱鞘の大刀、黒羽二重、五分月代に似て居るが、既にのさくである程なれば、然うした凄味な仲藏では無い。

按ずるに日本橋の上へは、困つた浪花節の大高源吾が臆面もなく顯はれるのであるが、未だ幸に西河岸へ定九郎の出た唄を聞かぬ。……最も此

のあたり、場所は大日本座の檜舞臺であるけれども、河岸は花道では無いのであるから。

變な好みの、萌黄がった、釜底形の帽子をすッぽり、耳へ被さつて眉の隠るゝまで低めづらした、背のづんとある殿丈造。搗てゝ加へて爪皮の掛つた日和下駄で、見上げるばかり大いのが、もくくとして肩も胸も腹もなく、ぶんぐり腰の下まで着込んだのは、熊の皮を剥いた、毛を其のまゝにした筒袖である。

此がもし對丈で、赤皮の靴を穿けば、樺太の海賊であるが、腰の下の見すぼらしさで、北海道の定九郎。

見よかし熊の袖を突出し、腕を顔のあたりへ上げ状に拱いた、手首へ面を引傾げて、横睨みにじろくと人を見る癖。

「歸るのかあ。」と少し訛る。

「はい。」

むかし権三は油壺、鍊藏から出たよな男に、爺さんは、きよんとする。

罷は件の横睨みで、

「おい、歸るのかあ。」

「家へかね。」

「うむ。」と頷く。

「歸りますよ、はい。」

「歸ると……ふん。何處か道寄りはせんのですかい。」と、悪く應柄な癖に時々變徹に丁寧なり。

「道寄りとおつしやりますと……」

「何よ、あれだ、お前、今彼處で。」

と人指一本、毛の中へ一寸出し、

「あれよ、藝者と少い男と三人連に逢ふたでせうが。」

「はい、はい。」と大な口を開けて續けざまに頷きながら、目は却つて半ば

閉ちて、分別したは老功也。

「知つてるだらうが、姉さんはお孝と云ふのだ、少い妓はお千世よ。」

「然やうでございます、はい。」と尙ほ胡散らしく薄目で見上げる。

「お爺どのは、何うやら大分懇意らしい様子ですな。」

「え、否、些少の。何、お前さま。何か其の、私に用事で。」

「火を一つ貸してくれ。」

と云ふ、煙草より前に、藏造りの暗い方へ、背を附着け、づんぐりと小溝を跨に挟んで大きく蹲み、帽子の中から、ぎろくと四邊を見た。が、落こぼれたやうな影もまばらで、門の開いたのは、地藏尊の門と、隣家の煙草屋の店ぐらゐに過ぎなかつた。

爺さんは遁腰に天秤を捻つて、

「さあ、お點けなさりました、だが、お早く願ひますので、はい。」

「聞くだけ聞けば用は無いだ。」

例の訛つて下卑た語調。歴は利かないが威すと、兩切の和煙草を蠟卷の口に挟んで、チュツと吸つて

「喃、阿爺どの、お孝が今だ、お前に別れて歸り際に、待つてるからおいで、屹とだよ。」と言ふたではないですかい。……遠やせまいが、喃。」

爺さんは、面中の皺へ皺を刻んで、

「え、え、然やうな事もござりましたよ。」

「秘さずとも可い。喃、阿爺どの。お前は何だ、内の千世の奴の親身でしやうが。孫娘に用が有つて逢ひに来たことが二三度あるです、で、俺は知つとるですわい。お前は何か、まかし俺の顔は知らんですか。」

と釜底帽、一名（のつべらばう。）とも云はるゝ、青べらの鍔を撈り上げ

て、引傾げて斜いで見せたは、酒氣も有るか、赤ら顔のづんぐりした、目の細い、まかし眉の迫つた、其の癖、小兒のやうな緊の無い口をした血氣壯の漢である。

「へい、否、お顔は存じて居りますほどでもござりませんが、其の上被の召ものでござります、お見事な。」

恁う云つたのは熊の筒袖。

「稻葉家様の縁起棚の壁でござりますの、縁側などに掛つて居て拜見したことがござりますよ。はい、何でござりますか、それでは旦那様は。」

「うむ、内のもの同然だ。」と願を撫でる。

界限では、且つ知つて且つ疑ふ。土地に七不思議が有れば其の第一に數へて可い。一石橋の河太郎、露地の駒下駄、お竹藏などゝともに、此の熊の皮が其である。濕深さうな膏ぎつたちよんぼり目を臘臍。毛並の色で赤熊とも人呼んで、所謂お孝の兄さんである。……本名五十嵐源吾、北海

道海産物商會主とある名札を持つから、成程臘臍も賣るのであらうが、他に何を商つて、何處に住むか、目下の處未だ定かならずである。

それ、後家の後見、和尚の姪、藝者の兄、近頃女學生のお兄様、もつと新しく女優の監督にて候ものは、いづれも瓜の蔓の茄子である。此の意味に於て、知るものは、お孝に於ける熊の皮を一方ならず怪むのであつた。

赤熊は指揮する體に願で擲つて、

「喃、阿爺どの、だから俺には何も秘すことは要らんですわい。」

「え、え、別に秘すではござりません、（これからお茶屋へ行つて一口飲むから、待つてるから屹とおいで。）と、はい、其の屹とでござりますが、何の、貴下様、こんな爺に御一座が出来ますもので。姉さんが唯御串戲におつしやつたのでござりますよ。」

「串戲ではなかつたがい、俺はな、あの、了ひかけた見世物小屋の裏口に蹲んで聞いたつたんだ。」

赤熊の此の容體では、成程立聽をする隠れ場所に、見世物小屋を撰ばねば成らなかつたらう、と思ふほど、薄氣味の悪い、その見世物は、人間の顔の尨犬であつた。

「それは、もし、萬ヶ一眞個に仰有つて遣はされたに爲ました處で、私ははじめから其の氣では聞きませなんだよ。」

「何うでも可い。それは構はんが、俺が聞きたいのは、お前んに後から來い、と云うて、先へ行つて待つ家の名ですわい。自分の内で無い事は知れて居る。……そりや何處ですか、阿爺どの。」

「……。」

「あゝん、阿爺い。」

「さあ、何とか云ふお茶屋であつた。」と獨言のやうに云つて、願卷を反らして仰向く。

赤熊は、チエと俯向けの股へ唾を吐いて、

「今時分、何處の茶屋が起きて居らうで。待合に相違ないがい、阿爺い、祕さんと云へ、阿爺い。自分が来いと云はれた先の名を忘れると云ふがあるもんですかい。悪くすると爲に成らんのですぞ。」と教員らしい口も利く。

「さあ、何か存じません、待合さんかも、其は分りませんが、てんで私の方で伺ふ氣はござりませんで、頭字も覚えませぬよ、はい。」

「で、何か。」

と一寸睨めつけた、が更つて、

「あの、野郎は何かい、あれは、ついぞ見掛けぬ奴だが、阿爺は知つとるのですかい、奴をですかい。」

「え、私も今までお見掛け申しはしませんので、はい、いづれお客人でござりませう。」

「客には違はんで、そりや違はんで。何方の客だ知つとるだらうが。」

「其は、もし、お尋ねまでもござりませぬ、孫めがお附き申して居りましたよ。で、(旦那様、お初に。どうぞ何分。)と私御挨拶をしました處で、爺の口から旦那様が嬉しい、飲まして遣らう、と姉さんが申されたのでござりましたよ。」

跡方も無い嘘は吐けぬ。……爺さんは實に、前刻にお孝にも其の由を話したが……平時は、縁日廻りをするにもお千世が左袂を取る此の河岸あたりは憚つて居たのである。が、抱主の家へは自分の了見でも遠慮をするだけ、可愛い孫の顔は、長者星ほど霽から目先にちらつくので、同じ年齢の、同じ風俗の若い妓でも、同じ土地で見たさの餘り、ふと此の夜に限つて、西河岸の隅へ出たのであつた。

歸りがけの霞の空の、真中を蔽ふ雲を抜けて、かんでらの前へ、飛出し

たお千世の姿は、爺さんの目には、背後の藏から昨夜の雛が抜出したやうに見えて、あつと腰を抜いて、平坦と胡座を搔いて、ものを言ふより莞爾々々として居たのである。

其の間にお孝は、葛木と二人で参詣を済まして、知らぬ振して歸るも可い、が、却つて氣まづく思はせやう。

(お爺さん虞美人草はないの、ぱつと散る。) 櫻草の前へ立つた時、……お孝に挨拶をした爺さんが、(此は旦那様。) と其の時葛木にお辭儀をしたので。

地藏様へお参りして、縁を結んで来た矢前——旦那様は嬉しいね——で、それから引上げる、待合の名を其處で教へて、旦那様に見立て、くれた禮心に、お爺さんには今夜一晚、……私が玉をつけて可愛いお千世を抱かして上げやう。……来て一所にお寐、串戯ぢやない、屹と待つて。……と云つた。

仔細は然うした事なのである。
赤熊が顯はれた。

此の毛むくじやらを、稻葉家の縁起棚の傍で見たと云ふだけ、其の血相と、意氣込みで、様子を悟つて、爺さんは、やがて、押くり返し何と言はれても、行つた先を饒舌らなかつた事は言ふまでも無い。

「御自分、ついて行つて見なさりや可かつた。」

何か知らぬが、お千世が世話になる稻葉家に退かぬ中の男、と思ふだけ、蟲を堪へて飽くまで下手に出た爺さんも、餘りの押問答、悪拗執さに、慥う言つて焦れたほどである。

知らぬくで、事は澄む、問はれる方が焦れたくらゐ、言敷を盡すだけ、問ふ方の苛立ち加減は尋常では無い!

「此の業突張、何だとッ。」

縁日ウヘリ

第三十二

「まあ、お前さん、怪我をしやしませんか。植木屋の布子の肩に、手を柔に掛けた、弱腰も撓むと見える帯腰に、優しい羽織の紋の、藤の細い清葉であつた。」

「拷問して遣る。」

赫と成つた赤熊が握拳を被ると齊しく、かんでらが飛んで、真暗に櫻草が轉げて飛ぶと、續いて、兩手で頬を抱へて、爺さんは横倒れ。

苦とも言はせず、踏のめす氣か足を擧げた赤熊が、四邊に人は、邪魔はと見る目に、御堂の灯に送らるゝやうに、參詣を濟まして出た……清葉が、臚の町に、明いばかりの立姿。……それと見て、つかくと、小刻み

ながら影が映す、衣の色香を一目見ると、じたくと成つて胴震ひに立窘むや否や、狼狽加減も餘程な、一度驅出したのを、面喰つて逆戻りで、寄つて来る清葉の前を、眞角に切つて飛んで遁げた、赤熊の周章てた形は、見るく日本橋の袂へ小さく成つて、夜中に走る鼯に似て居た。

其方は見返しもしないのである。

「お年寄を、こんなこと、何て亂暴なんだらう。」

「はいく。」

爺さんは居ざり起きて、自分がたしなめられた如く、畏つて、漸と口を利く……

「恐入りましたてござります、はい。」

「音がしましたわ、申戯ではありません。嘸お痛かつたでせうねえ。怪我をしたんぢやありませんか。」

前刻から響いて居た、鐵棒の音が、ふツと留むと、さつくと沈めた鞋

の響き。……夜廻りの威勢の可いのが、肩を並べてブツと寄つた。

一三

「何うした、」

「什うしたんだえ。——やあ、姉さん。」

「頭たち、御苦勞です。……今、其處へ驅出して行つた大な男なんだよ。」

「臆臆。」

「赤熊。」と二人は囁いて、一寸目配。

「姉さん、こりや何かい、お前さんお係合なんですかい。」

「否、私は唯通りかゝつたばかりなんです。でもまあ遁げてくれて可かつ

たけれど、抵つて來たら何うしやうかと思つたよ。……可哀想に、綺麗

な植木の花が。」

清葉は櫻草の泥鉢を、一鉢起こして持ちながら、

「手傳つて、そして、よく見て上げて下さいな。遅うござんすから。私は失禮ですが。」

一人は組合の看板を、しやん、と一ツ膝に控へて、

「御心配にや及びません。見て遣りますとも。」

「では、お爺さん、お大事になさいまし、お氣をつけなさいましよ。」

「はい、あなた方の御志、孫も幸福。それが嬉しうござります。」

とツちて、着きも無いことを云ふのを、しんみりと聞いて、清葉は何故

か、ほろりとしたが、一石橋の方へ身を開いて向返つた處で、衣紋をつく

つて、一寸、手招く。

鐵棒小脇に搔込みたるが、一人心得てつかくと寄つた。

「え、……え、腕車に、成程。え、可うがす、可うがすとも。そりや仔

細有りやしません。何、私たちに。申戲ぢやありません。姉さん、申……

……然うですかい、濟まねえな。」

其のまゝ見送つて小戻りする。此の徒も清葉が戻路の方を違へて、なぞ

へに一石橋の方へ廻つたのは知らずに居たらう。

サの字千鳥

第三十三

「何だか、唐突に謎見たやうな事だけれど、それが今夜の事の抑々と云ふのだから、恥辱も忘れて話すんだがね……」

上野から日本橋へ来る電車——確か大門行だつたと思ふ——品川行にした處で、あの往復切符、勿論乗換札ぢやないのだよ……其の往か復か、孰方にしろ切符の表に、片假名の(サ)の字が一字、何か書いてあると思ひますか。」

葛木は卓子臺に乗せた寄鍋に着けやうとした箸を、(まだ)とお孝に注意されて、其のまゝ控へながら話す。

お孝は時に、猪口を取つて、お千世の酌を受けたのである。

「サの字。」

「考へるに及ばないよ。そんな字は一つも無い。處が、松坂屋の前を越して、彼處は、黒門町を曲らうとする處だ……ふつと！心から胸へ、衣もの襟へ突通るやうな妙な事を思つたのが、其(サ)の字。左の手に持つて居た切符を視て、其處にサの字が一字あつたら、其から行つて逢ふつもり。」

「清葉さん」と薄目で見越して、猪口は紅を嚙むだかと思ふ、微笑のお孝の唇。

「……止さう、そんな事を云ふんなら。」と葛木は苦笑して、棒縞お召の寐寐衣を羽織つた、胡座ながら、兩手を兩方へ端然と置く。

潰島田を正的に見せて、卓子臺の端にびたりと俯向き、

「謝罪つた、謝罪つた。斷つて手前の方から願ひましたものを。千世ちゃん、御免なさい、と云つて、お前さんもおやゝまり。」と言憎ひから先繰りに訛つて置く。

「あら、姉さん、私は何にも。」とお千世は熱かつた銚子を持添へた、はつと薫る半帕を、其のまゝ銚子を撫で、云ふ。

「だつて、今、(行つて逢ふつもり)と此方がお言ひなすつた時は、直ぐに清葉さん、とお思ひだらう。」

「え、そりや思つてよ。」

「そら御覽、思つたつて饒舌つたつて、罪は同じくらゐだよ。其に、謝罪するには、お前さんの方が役者が上だからさ、よう、一寸。」

「貴方、御免なさいまし、ほ、ほ。」

葛木は然し考へさせられた様子が見えて、

「成程、思つたつて饒舌つたつて、違ひは無いか。いや、然うまでは、なか／＼悟れない。……と云ふのは矢張り色氣なんです。……極りは悪いがね。」

其のサの字なんだ。切符の表に、有るべき理由の無い一字が、もし有つ

たら、何時も控へ／＼断念めて引退る、其の心が屹と届くぞ！……想が叶ふ。打明けて言へば清葉が言ふ事を肯いてくれる。思切つて打着からう。サの字が無ければ、今夜も優柔しく、と言へば體裁が可い、指を脚へて引込まうと、屹と思つて熟と視ると、波打つ胸の切符に寄せる。夕日に赤い渚を切つて、千鳥が飛ぶやうに、サの字が見えた。

「あゝ。」と其の千鳥を見るやうに、引入れられて、屏風はづれに前髪を上げた、臉の色、お孝の瞳は恍惚と、湯氣の臍に美しい。

葛木も連れられて、夢を見るやうに面を合はせて、

「明いね、こゝの電燈は何燭だらう。」

「五燭よ、ほ、ほ。」とお千世が花やかな笑聲。鍋は暖く霞むたのである。

第三十四

「あれ……此の妓が笑ふ。」

と葛木も笑ひながら、

「客が此だから其の筈の事だけれども、私の行く家が、元來甚だ立派で無いのだ。ね、座敷の電燈が五燭なんだよ。……」

平時は、そんなでも無かつたが、過般中、連があつて、二人で出掛けた、爾時、其の千世ちゃんが来たんだね。確か……」

お千世が頷く。

「覺えて居る、それを知つて。笑ふんだ。私のやうな、向ふ見ずに女に目の眩んだものにとつては、電燈の暗いのなんぞ些とも氣には成らないがね、同伴の男は驚きましたせ。何しろ火鉢に掴まつて、暫時氣を静めて居ると、襖や障子が朦朧と顯はれるけれども、坐つた當座は、人顔も見えないと云ふ始末だからね、餘り力を入れて物を見るので、頭が痛い」と云ふんだよ、其の妓も知つて居るけれども、同伴の男が。

客の無い閑な家だし、不景氣だし、いづれ經濟上の都合だらうから、餘

分な御祝儀の出ない客が、(明を直せ。)も殿様じみるから、同じノートルで光は三倍強と云ふ重寶な電球ね、あいつを寄附しやうと成つて、……來て居た清葉が、

「東西、黙つて。」

と笑顔をお千世に向けて、ト故と睨んで見せる。

「私、何にも言やしませんわ。」

「いや、何とでもお言ひ、恚う成れば意地で饒舌る。」と呻と煽る。

「お酌。」

と自分でお孝が、ツツと銚子を向けて、

「其に限るの。貴郎は氣が弱いから可厭さ。」

「處で、……清葉が下階へ下りて、……近所だからね、自分の内へ電話を掛けて、婢にいひつけて、通りへ買ひに遣つた、タンダスタンが、やがて紙包みに成つて顯はれて、芝居の月の書割のやうに明るく成つた。」

其處が、お鹿(待合の名)の上段の間さ。」

「あら、申戯の間、可いわねえ。」

「いや、其の申戯ぢやない、御本陣式、最上等の座敷の意味だ。」

人の好い、氣の好い、(お鹿)の女房が喜んで、貴方の座敷だ——貴方の座敷だ、と云つて通す。まるで新座敷一ツ健増した勢だ。素ばらしいもんだね、恚う見えても。」

「有繋わね。」

「申戯ぢや無い、……いや、其の申戯では無い座敷の上段へ、今夜も通された——サの字の謎から、ぶつと電車で此地へ来てだよ……」

平時と違つて、妙に胸かどきつくのさ。頭の頂上へ圓髻をちよんと乗せた罪の無いお鹿の女房が、寂莫した中へお客だから、喜んで莞爾々々するのさへ、何うやら意見でも爲さうで成らない。

飯は濟んだ、と云ふのは、上野から電車で此地へ来る前に、朋達三人で

あの邊の西洋料理で夕飯を食べた。其處で飲んでね、最う大分酔つて居たんです。可訝くふらくするくらゐ。其の勢で、くわつと成る目の颯と赤い中へ、稻妻と見たサの字なんだ。

考へれば、千鳥の知らせでも無く、戀の神のおつげでも無い。酒のサの字だつたかも知れないものを。……其の酒さへ、弱身のある人が来て對向ひに成ると、臆面の無いほてつた顔を、一皮剝かれるやうに醒めるんだからの。お察しものです。」

カチリと力無く猪口を置く。

梅ヶ枝の手水鉢

第三十五

「座敷へ入ると間も無くさ、びり／＼硝子戸なんぞ敲破りさうな勢、がら

ん、どん、どたん、と豪い騒ぎで、藝者交りに四五人の同勢が、鼻唄やら、高笑。喚くのが混多に成つてね。上り込むと、此が狭い廊下を一つ置いた隣座敷へ陣取つて、危いわ、と女の聲。どたんと襖に打つかる音。どしん、と寝轉ぶ音。――楠の正成が―と梅ヶ枝の手水鉢で唄出す。

座敷を取替へて上げやう、此方は一人だから。……第一寄進に着いた電球に對してもお鹿の女房が辭退するのを、遠慮は要らない、で直ぐに、あの、前刻のあれ、雛の榮螺と蛤の新聞包みを振下げて出た。が、入交るのに、隣の客と顔が合ふから、私は裏階を下りて、鉢前へ一寸立つた。

……

此處に、朝顔形の瀬戸の手水鉢が有るんです。此が又清葉が寄進に附いたのさ。お鹿の内には、まだ開業當時と云ふので手水鉢も干杓も無かつた。湯殿の留桶に水を汲んで、簀の子の上に出してある。恐らく待合の手水鉢に干杓の無いのは、厠に戸の無いより始末が悪い。右は早速調達に及んだ

けれど、桶は其のまゝに成つて居たのを、清葉が心着いて、何時か、女房が勘定を届けか何か、瀧の家へ出向いた時、火事見舞に貰つたのが、まだ使はないで新しい、お役に立てば、と持たして返した。……

知つての通り、清葉の家は、去年の火事に焼けたんだね。

何ですよ、奥庭に有つた手水鉢を見ましたがね、青銅のこんな形、とお鹿の女房は仕方をして、そして龍の口を捻ると、ザアです。焼けてもびくともなさらない。すつかり青苔を帯びた所が好いなんのツて私に話した。

惚れた藝者の工面の可いのは、客たるもの、無心を言はれるより尙ほ怯む、……此處で又怯まされた。

清葉の手水鉢、で聊か酔覺の氣味。二階は梅ヶ枝の手水鉢。いや、桶の正成だ。……大將も惜い事に、懷中都合は悪かつたね。

二階へ返つて、小座敷へ坐直る、と下階で電話を掛けます。又冷評すだらうが、待人の名が聞える。

二人は黙つて微笑むのみ。

「ねえ、然うした電話が筒抜けに耳へ響くのは、事は違ふが、鳥屋の二階で、軍鶏の鳴聲を聞くのと背て居る。故に君子は庖厨を遠ざく……こりや分るまいが、大盡は茶屋の構の大からむことを望むのだとね。

(誰だ、誰だ、誰を掛けてるんだ。)(何、清葉だ、清葉とは誰だ。)(一座の藝者が小さな聲で、(瀧の家の姉さんよ。)(馬鹿清葉が、こんな家へ来るもんか。と隣座敷で憚らない高話。)

「お酌ぎ……千世ちゃん、生意氣だね。お孝なら飛んで来る、と言やしないか。」

「誰も、そんな事を言ひはしませんよ。」とお千世が宥めるやうに優しく云つて内端に酌ぐ。

「口惜いねえ……(清葉が来るもんか。)呼んで下すつた、それが私で、お孝が、こんな家へと云つて貰ひたかつた。……私は其處へ手水鉢なん

ぞぢやない、摺鉢と采配を兩手に持つて、肌脱ぎに成つて驅込んで驚かし遣つたものを。」

「でも、何だ、お前さんとは、今しがた逢つたばかりぢやないか。」

「ですから、今度つから、楠の正成で、梅ヶ枝をお呼びなさいよ、……其の手水鉢へ私なら三百圓入れて遣りたい、と此方でも思ふばかりだから、先方さまでも、お孝がこんな家へ来るもんか、とは言はないわね、——貴方お杯を下さいな、……チョッ口惜いねえ、清葉さんは。……」

第三十五

「少々加減が悪くつて、内で寐て居た、と云つて、黒の紋着の羽織で、清葉が座敷へ。」

前後七年ばかりの間、内端に打解けたやうな、そんな風采をして居たのは初めてかと思ふ。最も一寸ひく感冒と眩暈は持病で、都合に因れば假託

でね——以前、私の朋達が一人、此は馴染が有つて別な或待合へ行つた頃——一寸々誘はれて出掛けた時分には、のべつに感冒と眩暈で、いくら待つても通つて見ても、一度も逢へた事は無かつたんだ。最う斷念めて居た處、其の後宴會があつて、或お茶屋へ行くと、其の時、しばらく振で顔を見た。何だか、打絶えて居た親類に思掛けず出逢つたやうな可憐い氣がしたつけ。それが縁で、……時々、と云つても月に二三度、其のお茶屋で呼ぶとね、三度に二度は來てくれる。

其處の女中頭をして居たんだ、お鹿の女房と云ふのは。

「知つて居ますわ。」

「氣心は知つたり、遠慮は無しで、其處へ行くやうに成つてから、餘り月日を置かないで、顔だけでも見るのは、漸と一昨年の夏からだと思ふ。……處で、能く、あんなで座敷が勤まるよ。……最も私なんぞは座敷の中へは入るまいが、あの人と來たら、煙草は喫まず、酒は飲まず。」

「唯、貯るばかり。」

「まあ、堪忍し給へ。猪口は唇へ點けるくらゐに過ぎますまい、朝顔の花を噛むやうに。」

「敗軍の鬱憤ばらしに、其のくらゐな事は言つても可いのね。」

「堪忍し給へ。酒を喫まない藝妓ぐらゐ口説き憎いものは無い。」

「ちや、其方此方、當つて見たの。」

「否、人は何うだか私一人としてはなんだ。處で今夜だ——御飯は濟んだと云ふ、御粥を食べたんだとさ。」

「御養生でおいで遊ばすのね。……それから、」

「お鹿の女房も、暖るものが可からうと云ふんで、桶饅飩。」

「おや／＼おや。」とお孝は、がっかり、最一つうんざりしたらしい。

「……此處に入頭の旨煮と云ふのが有ります。」

と葛木は、小皿と猪口の間を、卓子臺の上で劃つて、

「一度讀めたが、以來お鹿の自慢でね、屹と通しものに乗つて出ます。……今日あたり土曜から日曜で私が来さうだと思ふ日は、煮て置くんだとお世辭を言つた。が、噫々、十ウに九ツ此も見納めに成らうも知れん、と云ふのは(サの字)の謎の事。……一度口へ出して、ビシリと遣られる、二度とは面は向けられまい、お鹿も今夜切と思ふと何となく胸が迫つて卓子臺の上が暗かつた……」

お孝はボンと楊枝をくべた、すうツと帯を揺つて焦れつたさうに、「一寸、まあ、待つて頂戴よ。お粥腹のお姫様を餛飩で口説いて、八頭を見て泣いたつて、宛然お精靈様の濡場のやうだね。能く、それでも生命があつて歸つて来たよ。確乎して下さいよ、後生だから、お前さん、私が附いてるから。」
で、するり卓子臺の縁を這つて、葛木の膝に手を掛ける。
「あゝ、痛い。」

其のまゝ、背中をトンと凭たして、腫を返すとお、千世を見て、「何うした、お爺さんは遅いぢやないか。」
「あら、姉さん来るもんですか。」
「私は来るつもりで待つて居たのに——其處の襖を開けて御覽よ、居るかも知れない。」

「まあ」と可愛く、目をぱちく。
「可いから一寸御覽。」
と言ふ、香の煙に巻かれたやうに、跪いて細目に開けると、翠帳紅閨に、枕が三つ。床の柱に櫻の初花。

口紅

第三十六

「御維新些と前だつて、芝の大門通りの足袋屋に名代娘の美人が有つた。其の時分、増上寺の坊さんは可恐く金を使つたさうでね、怪しからぬのは居周囲の堅氣の女房で、内々圍はれて居たのさへ有ると言ふのさ。其の増上寺に、年少な美僧で道心堅固な俊才の一人あつた。夏の晩方、表町へ買物が有つて、麻の法衣で、ごそくと通掛ると、其の足袋屋の小僧の、店前へ水を打つて居た奴、太粗雑だから、ざつと刎ねて、坊さんが穿きたての新しい白足袋を泥だらけにしたんだとね。……當時は電車で、毎々の事だが。」

娘が夕化粧の結綿で驅出して、是非、と云つて腰を掛さして、其處は商賣物です。直ぐに足袋を穿替へさせると成つて、豫て大切なお山の若旦那だから、打たての水に襦を取ると、お極りの緋縮緬をちらりと挟んで、つくまつて坊さんの汚れた足袋を脱がさうとすると、紐なんです。……結んだやつが濡れたと来て、急には解けなかつた爲に口を添へた、皓齒で其

の、足袋の紐に口紅の附いたのを見て、晩方の土の紺泥に、真紅の蓮花が咲いたやうに迷出して、大墮落をしたと言ふ、いづれ墮落して還俗だらうさ。

此方は悔悟して、坊主にでも成らうと云ふんだ。……いづれ精進には縁があります。自棄だから序に言うが、……私は、はじめて逢つた時、二十三年の年、……高等學校を出ると、祝だと云つて連出して、村田屋で御飯を騒つたものがある。酒は飲めず、畏つて煙草ばかり吐かして居たので、愛相に一本、一寸吸つて、歸りがけにくれたのが、

「承知々々。」と又笑ふ。

「でね、口紅がついて居たんだ。」

「氣障だ。」とお孝は手酌である。

「坊主には縁があるつて事だよ。」

軽く清いで盃をさしながら、

「處を又還俗さしてあげるから、もとツこだわね。可哀相に……其のかはり小鯨の鮫を賣りやしないか。」
と倦怠さうに居直つて、

「もし、其の吸口は何う遊ばしたえ……後學の爲に承り置きたい……ものでござるな。……よ、眞個に、」

「路傍では踏つけやう、溝も氣に成る……一石橋から流したよ。」

「あゝ、祟りますねえ。そんな男を、私も因果だ。」

「恐入ります、が聞いて下さい。」

「聞いて遣はす、お酌をおし……御免なさいよ。」と彌々酔ふ。

「然うだ——あゝお銚子が冷めました、と恚う、清葉が、片手で持つて、襦袢の深い、すんなりとした膝を斜つかひに火鉢に寄せて、暖めるのに炭火に翳す、と節の長い紅寶玉を嵌めた其美しい白い手が一ツ。親か、姉か、見えない空から、手だけで壓へて、毒な酒はお飲でない、と親身に言つて

くれるやうに、ト其片手だけ熟と見たんだ。……」

お孝が、偶と無意識の裡に一種の暗示を與へられたやうに、掌を反らしながら片手の指を腮に隠した。其の指には、白金の小蛇の目に、小さな黒金剛を象嵌したのが、影の白魚の如く絡つて居たのである。

後で知れた、衣類の紋も、同じ白色の小蛇の巻いた渦卷であつた。

「時に、隣の間の正成も、ふと音の消えた時、違棚の上で、チャチャ、と囁くやうに啼いたものがある。聲のしたのは、蛤です。動いたと見えて、ガサ／＼と新聞包が揺れたらうでは無いか。」

第三十七

(榮螺と蛤です。……)

思掛けない音に、一寸驚いた顔をした清葉に然う云つて、土産ちや無い、汐干では時節が違う、……雛に供へたのを放生會、汐入の川へ流しに來

たので、雛は姉から預かつたのを祭つて居る……先祖の位牌は、妹が一
人あつて、其が齊眉く、と言つたんだね。

そして御姉妹は、と清葉が訊くから、(實は。)と出ました……實は、そ
れに就いて、と言つたもんです。何に就いてだか自分にも分らない。けれ
どもね……何に就いたつて、あし掛七年の間、唯の一度も、氣障な、可
厭らしい、そんな事を言出せさうな機會と云つては一度も無かつた。

何時も、座敷の服装で、きちんと藝者と云ふ鎧を着て居るのから見れば、
羽織で、櫛巻だけに、客に取つては馴れ易い。覺悟は有つたし、サの字の
謎。……

實は、と目を瞑つて切掛けたが、からツきし二の太刀が續きません。酌
をして下さい、と一口に飲んで又飲んで飲んだ。もう一つ、もう一つ酌い
で欲しい、又、と立續けに引掛けても、千萬無量の思が、全然、早鐘の如
くに成つて、ドキくと胸へ撞上げるから、酒なぞ何處へ消えるやら。

口も濡れない處か舌か乾く……又、清葉が何にも言はずに、那樣に煽
切るのも道理だ、と斷念めたらしく見えて、黙つて酌ぐんだよ。

あゝ、酔つた。

と袖を擦並べたお孝の肩に、頭を支たさうに頽然と成る。のをお孝が向
ふへ、片手で邪慳らしく、トンと突戻した、と思ふと、其の手を直ぐに、
葛木の膝へ。敷いて重ねた腕枕に、ころりと横に成つて、爪先をすつと流
す、と靡いた腰へ、男の寢寢衣の裾を曳いて、半ばを掛けた。……
「肝心な處、……それから。」と自若として言ふ。

「弱つた……」

「私を口説く氣で、可うござんすか。眞個は、あの御守殿より、私の方が
口説くには煩いんだから、其の積で、しつかりして。」

「破れかぶれは初手からだ。構ふもんか!……更つて(清葉さん)……」

「黙つて顔を見ましたかい。」
「惚れたと云ふのが不躰であるなら、可憐いんです、床いんだ、慕しいんです。……私に一人の姉がある、姉は人の妾だった。……戀こがれた若い男が有つたのに、生命にかへて或相場師の妾に成つた……其は弟の爲だつたんです。」

私の父親は醫師だつたんだよ。……と云ふお醫師も、築地、本郷、駿河臺は本場だけれども、薬研堀の朝湯に行つて、二合半引掛けてから脈を取つたんださうだから、醫師の方では場違ひだね。
廣袖を着たまゝ亡くなると、看病やつれの結び髪を解きほぐす間も無しに、母親も後を追ふ。

姉は二十、私は十三、妹は十一で、六十を越して祖母さんが、あとに残つた……私と妹は奉公に出たんです。

姉は祖母をかゝへて、裏長屋に間借りをして、其處で、何か内職をして

露命をつないで居る。

私が小僧に成つたのは、赤坂臺町の葉茶屋だつた。
膝に島田を乗せながら葛木の色は白澄んだ。

チャラン、と河岸通、五郎兵衛町を出番の金棒。

一重櫻

第三十八

「忘れもしない、づつと以前——今夜で言へば昨夜だね——雛の節句に大雪の降つた事がある。其の日、兩國向ふの得客先へ配達する品があつて、其は一番後廻、途中方々へ届けながら箱車を曳いて、草鞋穿で、小僧で廻つた。日が暮れたんです。兩國の橋を引返した時の寒さつたら、骨まで透つて、今思出しても震へたう。」

何の事は無い、山から小僧が泣いて来たんだ。

人通りは全然無し、大川端の吹雪の中を通魔のやうに駆けて通る郵便配

達が、唯た一人。……其が立停まつて、チョツ可哀相にと云つた。……

：聲を出して泣きながら、聲も涸れて、漸と薬研堀の裏長屋の姉の内の臺

所口へ着いた、と思ふと感覚が無い。

浸々と降る雪の中に、唯どしんと云ふ音がしたつて、姉が後で言ひく

した。

處が何うです……妹は妹で、其の前夜から奉公先を病氣で下つて、内

で寐て居る。

此が又悲惨でね、……聞いて見ると、猫の小間使に行つて居たんだ。

主人夫婦が可恐い猫好きで、其の爲に奉公人一人給金を出して抱へるほど

だから、其の手の掛る事と云つたら無い。お刺に御秘藏が女猫と来て、

産の時などは徹夜、着つ切。生れた小猫に、すぐに又色氣が着くと、何と

何うです、不潔物の始末なんざ人間なみに爲せられる。……處へ、妹が

女の子の癖に、豫て猫嫌ひと来て居たんだものね、死ぬほどの思ひで、辛

抱はしたんだが、遣切れなく成つて煩らいついた。(少し變だ。顔を洗ふの

に澄まして片手で撫でる、氣を鎮めるやうに。)と云つて主人から注意があ

つたんだとね。

祖母は祖母で、目を煩らつて殆んど見えない。二人の孫を手探りにして

赤い涙を流すんぢやないか。

私は氣が着くと、其の夜、——後で妹の話を聞いて慄然して飛んで出た

が、猫行火に嚙着いて居て、豆煎を頬張つたが、餘り腹が空いて口が乾い

て咽喉へ通らないから、番茶をかけて搔込むだつて。

内職の片手間に、近所の小女に、姉が坂東を少々、祖母さんが宵は待ぐ

らゐを教へて居たから、豆煎は到来ものです。

(白酒をおあがり、晋ちやん、私が縁起直しに鉢の木を御馳走しやう。)と、

一六〇
鉞落しの長火鉢の前へ、俎と庖丁を持出して、雛に飾つた榮螺と蛤をおろしたんだ。

重代の雛は、掛物より良い値がついて、疾に賣つた。有合はせたのは土彩色の一もん雛です。中にね、——潰島田に水色の手柄を掛けた——年数が経つて、簪も抜けたり、其の鬢の毛も凄いやうな、白い顔に解れたが——一重櫻の枝を持つて、袖で抱くやうにした京人形、私たち妹も、物心覺えてから、姉に背て居る、姉さんだくと云ひくしたのが、寂しく其の蜜柑箱に立つて居た。其をね、姿見を見る形に、姉が顔を合はせると、其處へ雪明りが映して蒼く成るやうに思つたよ。姉が熟と視めて居たが、何と思つたか、榮螺と蛤を舊へ直すよ、入かはりに壇へ飾つた其の人形を取つて、俎の上へ乗せたつけ……」

「千世ちゃん。」

と葛木の膝枕のまゝ、お孝が呼んだ。

「はあ。」と襖越しに返事した。お千世は、前刻其處を見せられた序に、……(眠からう先へお寐な。)と言はれたのである。そして寂寞して今しがた、するくと帯を解いた形氣がした。

第三十九

「寒く成つた、搔卷をおくれ。」

とお孝は曲げた腕を柔く疊に落して、手をかへた小袖の縞を、指に掛けつゝ男の膝。

「姉さん、私、帯を解いてよ。」

「生意氣お言ひでないよ、當も無しに。可いから持つといで。」

「うまい装をして、」

「御免なさいまし。」と抱いて出た掻巻の、それも緋と淺黄の派手な段鹿子であつたのを、萌黄と金茶の翁格子の達手巻で、ぐいと縊つた、白い乳房を夢のやうに覗かせながら、ト跪いてお孝の胸へ。

襟脚白く、起上るやうにして、づるりと咽喉まで引掛けながら、

「貴方、同じ柄で頼母しいでせう、清葉さんの長縹袴と。」

學士は黙つて額を壓へる。

「姉さん、枕よ……」

「不作法だわ、二人で居る處へ唯た一ツ。」

「知らない、姉さんは。」

「持つてお歸り。」

「はい。」

と立つて、脛をすくくと次の室へ。襖を閉めやうとして一寸立姿で覗く。羽二重の紅なるに、緋で渦巻を絞つたお千世の其の長縹袴の絞が濃い

ので、乳の下、鳩尾、窪みに陰の映すあたり、鮮紅に血汐が染むやうに見える。――姐に出庖を控へて、潰島田の人形を取つて据ゑた其話しの折の所爲であらう。

凄さも凄いが、艶である。其の緋の絞の胸に抱く蔽の白紙、小枕の濃い

淺黄。隅田川のさゝ波に、櫻の花の散敷く俤。

非ず、此時、兩國の雪。

葛木は話したのである。

「姉の優しい眉が凜と成つて、顔の色が蠟のやうに、人形と並んで蒼みを帯びた。餘りの事に、氣が違つたんぢやないかと思つた。

顔の色が分つたら祖母さんは姉を外へ出さなかつたらうと思ふね。――

兄弟が揃つた處、お祖母さんも、此の方がお氣に入るに違ひない、父上、母上の供養の爲に、活ものだから大川へ放して來やうよ……で、出たつ切、十二時過ぎまで歸らなかつた。

妹が涙ぐんで、(兄さん、姉さんは？見て来て下さい。)と言ふ。私も水へ飛込み兼ねない勢で、臺所へ出やうとすると、姉は威勢よく其處へ歸つた……

白鳥を提げてね、景氣よく飲むんだつて……當人既に微酔です。お待ち遠様と持込んだのが、天麩羅蕎麥に桶饅頭。

女二人が天麩羅で、祖母さんと私が饅頭なんだよ。考へて見ると、其の時分から意氣地の無い江戸兒さ。

其の晩、豫て口を利いた濱町の骨董屋の内へ驅込むで、(あい。)と返事をしたんだつて。

浅草、花川戸の、軒に桃の咲く二階家に引越して、都鳥の籠甲の花笄、當分は島田のまゝで、祖母さんと妹が其處へ引取られて、私は奉公を止して、中學校の寄宿舎へ入る。續いて白筋の制帽と成つて、姉の思一つなんだ。かみわざで助けられるやうに、金釦の制服と漕ぎつけた。

伐木丁々

第四十

「……迄は、先あ可かつたんです。……處が、其の後祖母の亡くなつた時と、妹が婚禮をした時ぐらゐなもの、可懐い姉は、毎晩夢に見るばかり。……私には逢つてくれない。二階の青簾、枝折戸の朝顔、夕顔、火のみの雁がね、忍返しの雪の夜。それこそ、啼く蟲か小鳥のやうに、どれだけ今戸のあたり姉の妾宅の居周圍を、あこがれて徘徊つたらう、……人目を忍び、世間を兼ねる情婦でも有るやうに。暗號で出て来る妹と手を取つて、肩を抱合つて、幾度泣いたか知れませんか。……姉は恥かしいから逢はぬと歎く。女の身體の、切刻まれる處が見たいか、と叱るんだね。

其の弟の身に成ると、姉は隅田川の霞の中に、花に包まれた欄干に立つて、私を守つて居るやうでもあるし、紅蓮大紅蓮と云ふ雪の地獄に、俎に縛られて、胸に庖丁を擬てられながら、救を求めて悶えるとも見える……死ものぐるひに勉強をしたよ。

大學へ入ると言ふ、其の祝ひだ、と云つて、私を村田屋へ連出したのは、姉の旦那だ。

其の時清葉を見ました。

心の迷ひか、濟まん事だが、背恰好、立居の容子が姉に肖然。

此の方は手形さへあれば、曲りなりにも關所が通られると思ふと、五度に一度、それさへ半年の間なんだ、……小遣を貯めるんだからね。……また藝者の身に成つて見りや、迷惑な事は夥多しい。」

お孝は黙つて頭を掉つた。

「姉の方は、天か地か、まるで幽明處を隔つ、遠い昔のものがたりの中に

住むか、目近に姿ばかりの錦繪を見るやうだらう。同じ、娑婆に、おなじ時刻に、同じ檜物町の土地に、たい町を離れて、本郷の學校の門と、格子戸を隔てたいけで住むで居る筈の清葉さへ、夢に見ても夢でさへ、遠出だつたり、用達しだつたり、病氣だつたりして逢へないんだものね。半年の間熟と目を塞いで居て、お茶屋の二階で目を開いて、ドキ／＼する胸を壓へるのが其の仕誼なんだ。

一度も夢で泣いたのは……」

天井を高く仰いで云つた、學士の腫は水の如し。

「何處か……私の寄宿舎の二階と向合ふ、同じ高さに川が一筋……川が一筋。……で、夢だらう。水は其の下を江戸川の（どん／＼）ぐらゐな流れで通る。向ふ岸に二階がある。表だけ見えて、欄干が左右へ……真中に榎の大樹があつて仕切る、其の二階がね、一段低く成つて流に望んで、も一つ高い座敷が裏に有りさうなんだ、夢だからね、お聞き……いや聞

いておくれ。

其の左右の欄干の、向つて右へ、嬢娜と掛つて、美しい片袖が見える。ト頬杖か何か、物思はしい風情で、熟と此方を視めるらしい、手首が雪のやうに、ちらりと見えるのに、顔は板に隠れたんだ。板は何處か、深山の崖か、遠い驛路の出入境に有る、繁つた大なる年経る樹らしい。其處へね、むく／＼と動いて葉を分けて、ざわ／＼と枝を踏んで、樵夫が出た来た。花咲爺の晝にあるやうな、あゝ、と横を向いて卓子臺を幽に拊つて、

「前刻、西川岸で逢つた植木屋……ね、一寸肖て居たよ。取留めは無いのだけれども。」

其爺さんが、コツン／＼と斧を入れる。が、爺の音は、あの伐木丁々として、百里も遠く幽だのに、一枝、二枝、枝は、ざわ／＼と緑の水を浴びて落ちる。」

第四十一

「三枝、五枝、裏搔いて其の繁茂が透くに連れて、段々、欄干の女の胸が出て、帯が出て、寝着姿が見えて、頬が見えて、鼻筋の通る、瞳が澄んで、眉が、はつきりと成る。縄毛がはらく／＼とかゝつて島田鬚が見えた。」

川の水が少し渺として、月が出たのか、日が白いのか、夜だか晝だか分らない。……間が凡そ何のくらゐか知れないまで遠く成る、と其の一段高い女の背後に、すつくと立つた、大なる影法師が出た。一段高いのに、突立つたから胸から上は隠れたが、人とも獸とも、大なる熊が蔽はれかゝるやうに見えたんだがね。」

「一寸待つて！」

お孝の怯えたらしい慌しさ。が沈んで力ある聲に、學士は夢から現の世に引き戻されて、

「え、と驚く。」

「此處を抱いて居て下さい。」

其の聲は、最う静であつた。搔卷越に、お孝は學士の手を我が胸に持添へて、

「さあ、話しておくんないな、——身に染みるわねえ。」

「たあいは無いだよ。……すがくしいが、心細い、可哀な、しかし可懐しい、胸を絞るやうな驛路の鐸の音が、りんくと響いたので、胸がげつそりと窪んで目が覺めるとね、身體が溶けるやうな涙が出たんだ。」

其の二階越の女が、何うしても姉なんだ。いや清葉だつた。然も、つひ近頃の事なんだよ。」

「……………」

「話が前後に成つたんだがね、……夢を見たのは、姉が最う行衛知れずに成つてからです。」

「行方知れず?……………」と手を支く音。

「私が兎に角、今の學校を卒業すると、妹には代々の位牌を、私には其の一組の雛と、人形を紀念に残して、観音様の巡禮に、身は亡きものと思つておくれ、——妹に——達者でおくらし、——私に、晋さん御機嫌よう——」

妹には夫がある。

此の行衛を探すには、私が巡禮に出なければ成らないんだ。が、それは今出来兼ねる。

雖然、夢にも快く逢へる事が、似た人にさへ思ひのまゝには口も利けない。七年越し（私は、姉が欲しい、……………お前さんが欲しい、清葉さん。）と清葉に云つた。

今夜思切つて言つたんだ。

唯他人でありたく無い！ が、いま此の二人は、きやうだいに成り得る

世界を持たん。夫婦に成りたい。一所に成りたい、唯他人ではありたく無い。まかし様子を見ても大抵分る、此は肯入れてはくれないだらう、断然断はらるゝに違ひない！

私は、お前さんから巡禮に成る、少くとも行方知れずに成る、杯をうけて下さい。」

「御守殿は何と云つて？」と言は烈しく、搔卷はすらりとして居る。

「清葉は、すつと横を向いて、襦袢の袖口をキリキリと噛んだ。」

「一件だね。」

「私は胸が迫つたよ。……、清葉が、聲を霞ませて言つた。……（お察し申します。）」

「へえ。」

「（貴方の姉さんが私でしたら、貴方に何とおつしやるでしやう。貴方は姉さんにお聞き下さいませ。私には母があります、養母です。）と俯向いたが、

起直つて、（母に肯かなければ成りません。ト……また私には子があるんです。其の子の父があるんです。一人極つた人があれば、果敢ないながら藝者でも操を立てねば成りません。藝者の操、貴方お笑ひなさいませ。私は泣いて、其のお別れの杯を頂きませう。）……

「あゝ、言ひさうなこつた、御守殿め、チョツ。」と膝を丁と支くと、颯と搔卷の紅裏を繻す、お孝は獅子頭を刎ねたやうに、美しく威勢よゝ、きちんと起きて、
「でも、有繫に土地の姉さんだねえ。」

空 蟬

第四十二

「もし、貴女様、もし……」

此處に葛木に物語られつゝある清葉は、町を隔て、屋根を隔て、彼處に唯一人水に望むで欄干に凭れてイむ。……男の夢の流では無い、一石橋の上なのである。が、姿も水も其の夢よりは幻影である。

唯、小腰を屈めて差覗き、頭を揺つて呼掛けたのは、願巻も尙だ除らな

いまゝの、植木屋の甚平爺さん。

「今頃、何をしておいでなさります、お一人でこんな處に……は……」

と底力の無い愛相笑で、

「いや、もう、人様の事をお案じ申すと云ふ効性もござりません、……お助けを被りました御禮を先へ申さねばなりませんのでござりました。はい、先刻は何とも早や、お庇で助りました。頓と生命拾ひでござります。それに又、お情深い貴女様、種々と若衆たちまで、お優しいお心着を下さ

いまして、お禮の申上げやうもござりません。」

「あゝ、植木屋さん。」

と云ふ……人を見た聲も様子も、通りがりに、其の何となく消れたのを見て、下に水ある橋の夜更、と爺が案じたほどのものでは無い。

「今、お歸りなんですか。」

「はい、えゝ、貴女からお心添へ、と申されて、途中で又待伏せでもされるやうな事があつては成らねえ。泊れ、世話をせう、荷なりと預つて遣らうと、恚う云うて下さいましたが、何、前後の様子で、私、尺を取りました寸法では、一時赫として手を上げましたばかり。然して意趣遺恨の有る覺えとてもござりませす、……何また、此の上に重ねて亂暴をしますやうなれば、一旦は些と遠慮がござりました故と控へましたやうなもの、いざと成れば、何の貴女、唯打たれて居りますものか。向脛を搔拂つて、ぎやつと傾倒らしくてくれますわ。」と影辨慶が橋の上。固より好む天秤棒、真中取つて擔ぎし有様、他の見る目も覺束無い。

附け景氣の廣言さへ、清葉は眞面目に憂慮ふらしく、

「でも、お年寄が、危いぢやありませんかね、喧嘩は唯當座のものですよ。一晩明かしてお歸りなされると可かつたのにねえ。」

「はい、それに實は何でござります、……大分年數も経ちました事ゆゑ、一時半時では、誰方もお心附の憂慮はござりませんが、……貴女には、何をお秘し申しませう、私は其の、はい、以前は矢張り此の土地に住るましたもので。」

「まあ、」

「え、……悴が相場ごとに掛りまして分散、と申すほど初手から然したる身上でもござりませぬが、幽には、御覺えがあらうも知れませぬ、……元數寄屋町の中程の、もし、へ、へ、煎餅屋の、はい、其の時分からの爺でござりますよ。」

「あら、お店の前の袖垣に、朝顔の咲いた、撫子の綺麗だつた、千草煎餅の、知つて居ますとも——まあ、お見それ申して濟まないことねえ。」

はづんだ聲も夜と、もに沈んで聞えて静である。

「滅相な、何の貴女。お忘れ下さるのが功德でござりますよ、はい、でも、私は粗とお見覺え申して居ります、たしか……瀧の家さんのお妹御……」

「……。」

「え、小女い方よ、お爺さん、こんなに成つて……お可憐いのね。」

第四十三

「御主婦さんは、」

「養母ですか。息災ですよ。でも、めつきり弱りました。」

「私、蔭ながら承つて存じて居ります。姉さんが、お亡くなりになりまして、たさうで。あの方はお丈夫で、……貴女はお小さい時から悪戯もなさらず、何時もお弱くつておいでなりましたが、然かし、まあ、御機嫌よう、御全盛で。」

「否、全盛處ではござんせん。姉が達者で居てくれますと、養母も力に成るんですけど、私がかんなですからね。——何ですよ、何時も身體が弱くつて困りますの。」

「お見受け申しました處でも、些と蒲柳なさり過ぎますて。」

何やら、もの思はしげな清葉の容子を、最う一度凝めて視て、

「最も柳に雪折なし、却つて御心配の無いものでござります。でござりますか。」

爺さんは天秤を潜るが如く、腰を極めて、一息寄る。

「其のお弱い貴女が、又………何で、今時分、こんな處に、夜風は毒の、橋は冷えます。私なんぞ出過ぎましたやうでござりますが、お案じ申すのでござりますよ。」

「難有う、………身投げぢやないの、お爺さん。」

「滅法界な、はッはッ。」

「でも、眞個は投げても可いんです、今夜あたり。」と微笑んだ、が、笑顔の氣高いのが凄いやうに見える。

「滅相至極も無い。」

「眞味に心配して下さるのを私、申戯を云つて済みません。眞個身でも投げさうに、それは見えませんでしたせうとも。一人で、こんな處に茫乎して。」

實はね、お爺さん、宵から御目に掛つて居た客が、歸りがけに此の橋から放生會をなすつた品があるんです。——昨日はお雛様のお節句だわね

——其の蛤と榮螺ですつて。」

「はい、成程。」

「殿方ばかりでなさるんでは、故とらしくも聞えますが、其の方は御姉さんの御遺言………まあね、………遺言と云つた譯なんですとさ、私も姉が亡く成つたんです。」

何ですか、可懐くつて、身に染みて成らないのに、少々仔細が有りまし

てね、最う其の方とも此切、お目に掛られないかも知れなく成つたの。七年以來、夢にまで、眞個に夢を見て頂くまで、最負に……思つて……下すつた……のに。」

袖を落して惰るゝ手に、鐵の欄干は痛々しい。

「私……最う御別離をお見送り申し旁々、切めて、此の橋まで一所に来て、優しい事を二人でして、活きものゝ喜ぶのを見たかつたんですけれども、二人ばかりの臙夜は、軒續きを歩行くのさへ謹まねば成らないやうに、もう久しい間……私ねえ、躰けられて居るもんですから、情ないのよ。お爺さん。お恥かしいぢやありませんか。其のね、(二人で来る。)と云ふのさへ思出さねば氣が着かない迄、好きな事、嬉しい事、床しい事も忘れて居……お暇乞をしたあとで、何だか頻りに物たりなくつて、三絃を前に、懐手で熟と俯向いて居る中に、漸つと考へ出したほどなんですもの。

私許でも、眞似事の節句をします。其の榮螺だの蛤だのは、何うしたら

うと、何年越かで、ふツと、其も思出すと、……屹と何かと突包んで一所に食べたに違ひない。菱餅も焼くのを知つて、其が草色でも、白でも、紅色でも、色の選好みは忘れて居る、……あ、何と云ふ空蟬の女に成つたらう、と胸が一杯に成つたんですよ。」

第四十四

「お地藏様の縁日だし、序と云つては失禮だけれど、其方と御一所に、お參詣をしながら、貝を流しに來られたら、何んなに嬉しかつたらうと思ひますとね、……それなり内へ歸る氣に成れなかつたもんですから、後を慕つたやうに見に來ました。」

お爺さん、其の方は、随分、私に思切つた、殿方の口からでは、嗚ぞ仰有りにくからうと思ふ事さへ、打明けて下すつたのに、私は女で、女の口から言つて可い、言はねばならない……今、唯、お前さんに話をした、

一所に此處までお見送りがしたい、と其れだけさへ、口へは出せない身な
んですもの。

大抵お察しなさいまし。……小兒のやうな罪の無い、そして其より、
酔いも甘いもよう知つて、浮世を悟つたお老人は佛様、何にも隠す事は無
い。……私には、小兒の親の旦那があります。

何うせ女房さんや兒があつて、浮氣をなさるくらゐな人。妾てかけは他
にもある。珍らしくも無い私を、若い妓に見かへないで瀧の家一軒所帯の
世話をしてくれますのは、棄てる言分が無いからです。落度があれば其切、
まことに頃日の様子では、内々ぢや持扱つて、私の落度を捜して居るかも
知れませんか。大一座でいもあるなら知らず、差向ひでは、串戯も思切
つては言へませんわ。

那様に、だらしなく意氣地なく、色戀も、情も首尾も忘れたやうな空洞
に成つたも、燃立つ心を冷しく、家を大事と思ふばかり。其の家だつて

私のぢやない。……

ねえ、お爺さん。

と面を背けて、

「養母へ義理たつた一つばかりなのよ！……」

亡く成つた姉に、生命がけの情人があつて、火水の中でも添はねば成ら
ない、けれど、借金のために身抜けが出来ず——以前盗人が居直つて、白
刀を胸へ突きつけた時、小夜着を被せて私を庇つて、びくともしなかつた
姉さんが、義理に堰かれて、逢ふことさへ出来ない辛さに、私を抱いてほ
ろ／＼泣く。

出生は私、東京でも、静岡で七つまで育つたから、田舎ものと言はれや
うけれど、……其の姉さんを持つたお庇に、意地も、張も、達引も、私
は習つて知つて居る。

其の時に覺悟をして、可厭で可厭で成らなかつた、旦那の自由に成つた

んです。又然うして、後々までも引受ければ、養母が承知をして、姉を手放してくれたんですもの。……

ちやんと養母に約束した、其の時の義理がありますから、自分ちや、生命も随意には成りやしない。

お爺さん、私や藝者のかざかみにも置かれたい……意氣な人には御守殿だ、……奥さんだ、お部屋だつて言はれます。

はなじろみながら眉の昂つた、清葉の聲は凜とした。……途中でお孝の三人づれに行逢つたを爺は知るまい。が、言ふ清葉より聞く方が、ものをも言はず、鼻をすゝる。

「心に思ふ萬分一、其の一言は云はないでも、姉の身ぬけに慙うくと、今云つた義理だけは、私は其の人に言ひたかつた。言ひたかつたんです。」と思はず絶つて泣くやうに、聲が迫つて、

「ですけれど、他人は知らず、私たち、然うした人に、此の事を打明けて

は、死んだ姉に恩を被せる、と乗つてる蓮の臺が裂ける……姉は私に泣いてませう、泣いてくれるのは嬉しいけれど、氣の毒がられては、私は濟まない。

坊主に成る、とまで眞實に愚に返つて、小兒のやうに言つた人に、……私に堪へて黙つて居ました。……

彩ある雲

第四十五(一)

爺さんは、前刻打撲された時怪飛んだ、泥も拂はない手拭で、目を拭くと、はッと染みるので、驚いて慌しいまで引擦つて、

「他所目には大所の御新姐さんのやうに見えます、其の貴女が、……矢張り苦界、孰れ苦の娑婆でござります。それにつけましても孫が可愛うご

「さいますので、はい。」

沈めて、静に、

「お孫さん？……」

「え、女の子でござりました。」

「まあ、私は些とも知りません。」

「御最でござりますとも、……未だ胎内に居ります内に、唯今の場末へ

引込みましてな。」

「では、私の静岡と同じだわね、それは、まあ、お楽しみ。」

「否、處が何うして、處が何うして。」

と頭を掉つて、下ろして有る天秤に掴まりながら、

「大苦みなわけでござりまして、貴女方と同一と申すと口幅つたい、其の

数でもござりませんが、……稲葉家さんにお世話に成つて居りますの

で、はい。」

「お、お孝さんの許に、……些とも私知らなかつた。」

「はい、彼方の姉さんも、あの御氣象で、よく可愛がつて下さいます、が、願へますものならば、貴女のお手許に、と其の時も思つた事でござります。否、不足を言ふではござりません。藝者と一概に口では云ひ條、貴女は、それこそ歴乎とした奥方様も同じ事。一人の旦那様にちやんと操をお守りなされば、こりや天下第一本筋の正しい道をお通りなさる、女の手本でござります。彼娘にもな、あやからせたう存じますので。」

「飛でもない、お孝さんこそ可い姉さん。あ、でなくては不可ません。私は何も、曲んだり拗ねたりして、恚う云ふのではないんです。お爺さん、色でも戀でも無い人に、立てる操は操でないのよ。……一人に買はれる玩弄品です。大人の手に遊ばれる姉さま人形も同じ事。」

ふと言絶え、嘆息して、

「此處で榮螺を放した方は、上の壇に榮螺が乗つて、下に横にして供へら

れた左袂の人形を、私とは御存じないの。」

と、半ば亂れた獨言、聞かせぬつもりが聲が曇る。

「何も浮世でござりますよ。」

と分らぬながら身に詰まされて、爺さんはがつくりと蹲んで俯向き、もう一度目を引擦つて、

「何の眞似は出来ませいで、切めて藝ごとで、勤まるやうに成れば可いと存じますよ。貴女などは何が何でも、其處が強味で入らつしやいます。憂さも辛さも、糸に掛けて唄つてお了ひなさりまし。藝ごとも貴女ぐらゐにお成りなさると、人の樂みより御自分のお氣晴しに成ります。……中にも笛は御名譽で、お十二三の頃でございましたらうか、お二階でなさいますのが、私ども一町隣、横町裏道寂と成つて、高い山から谷底に響くやうでござりましたよ。」

「ピイ〜 笛の麥藁ですかえ、……あんな事を」とむら雲一重、薄衣の

晴れたやうに、嬉しさに打微笑む、月の眉の氣高きよ。

「あの、時分の事を思ひますと、夢のやうでござります。此の頃でも、御近處だと、時々聞かれますのでござりませうがな。」

「可鹽梅。」

とやゝ元氣に、

「幸と聞こえやしませんよ。……でも笛だけは、もう何時も、帯につけて居ますけれども、箱部屋の隅へ密として置くばかり。七年にも八年にも望まれた事はありません。世間ぢや誰も知らないのに、お爺さん、ひよんな事を言出して、何だか胸があつく成つた。笛が動いて胸先へ！……嬰兒のやうに乳に響く！ 何時でも口を結へられて、袋に入つて居るんだから。」

と命を抱く羽織の下に、屹つと手を掛けた女の心は、錦の綾に、緋總の紐、身に引きしめた臍の顔に、彩ある雲が、颯と通る。

眉を照らして、打仰ぎ、

「……世に出て月が見たいんでせう。……吹きはしませんよ。」

とすらりと抜いて、衝と欄干へ姿を斜めに、指白々と口に取る。

あゝ、七年の昔を今に、君が口紅流がれしあたり。風も、貝寄せに、をくれ毛をはらくと水が戦ぐと、沈んだ榮螺の影も浮いて、青く澄むまで月が晴れた。と、西河岸橋、日本橋、呉服橋、鍛冶橋、敷寄屋橋、松の姿の常盤橋、雲の上なる一つ橋。二十の橋は一齊に面影を霞に映す、橋の名所の橋の上。九百九十九の電燈の、大路小路に残つたのが、星を散らして玉を飾つて、其の横笛を鏤むる。

清葉は欄干に上々しい。

甚平は手拭を鷺掴みで、思はず肩を聳かした。

「吹奏まし、く。何の貴女、誰、誰が答めるもので。こんな時……不忍の池あたりでお聞き遊ばすばかりでございます。」

「勿體ないこと。……」

と笛を袖へ、又うつむいて消れたのである。

河童の時計の蒼い浪、幽な水音。どぶりと一つ、……一時であらう。

鴛鴦

第四十五(二)

稻葉家のお孝は冷く成つた、有合はせの猪口を呼吸つぎに呷、と一口。

……で、薄ら寒いか兩袖を身震ひして引合はせたが、肩が裂けるか、と振舞は激しく、風采は華奢に見えた。

が、すつさりと笑ひながら、

「それちや、清葉さんばかり標致がよくつて、貴方は、だらしが無いんだわね。」